
行灯の昼

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

行灯の昼

【Zコード】

Z2394Y

【作者名】

蒲公英

【あらすじ】

株式会社エア・トラッド・ジャパン、よつづめのお話です。

地味で口下手、見た目も凡庸。万事につけて目立たない男の一人称のお話。フツーの人たちがフツーの生活の中で、ゆつたりと心を通わせる話になると、いいなあ。

* R-15は保険なので、そんなシーンが出てくるかどうか、まだ未定。

「長谷部君、肩揉んでえ」

「デスクの上に腕を投げ出す水元佑子、三十四歳経理部総合職。

彼女は二十七歳で一度姓が変わり、一十九歳の時に元の姓に戻った。バツイチ子ナシ、そして俺の同期だ。

俺が社内で唯一、気安く口を利く女もある。

三十四にもなつて、女と喋るのに緊張するのは、俺が慣れていないせ이다。

俺は口下手だ。ツラも女ウケしない。

二年後輩の山口みたいに、ツラも良ければ弁も立ち、上司の覚えがめでたいヤツと違うのだ。

「なんで、水元の肩を揉まなきゃなんないの？」

「長谷部君の芋虫みたいな指が、気持ちいいの」

芋虫ねえ……確かに、俺の指は太い。

「新しい派遣の子が、なかなか使えなくつてえ。坂本さん、よく働いたんだけどなあ」

「ああ、なんだかパニック起こしてたつて子」

水元の首から肩にかけて、揉み解してやる。

「いててつ！もっと柔らかく揉んでよう」

「力なんか入れてないぞ。血行悪いな、ババアみてえ」

「花の独身よ、私」

「まったく……祝儀、返せ」

「ああ、その節は有難う存じました。もう使っちゃったよーん

残業の薄暗くなつた社内で、経理部にも水元しか残つてない。

俺の所属する設備施工部も、もう空だ。

「およ。ラブ・シーンかと思つたら、長谷部さんと水元さんかあ

開発営業部のお調子者、萩原がパーティー・ションの隙間から顔を出した。

「あー、長谷部君と愛の語らいの最中よ。邪魔しないで」
水元が軽やかに返すのを、羨ましく聞いていた。

「長谷部さんが愛の語らいつすか。誠意ありそりうすねえ」
ほらね、俺の評価なんて、そんなもんだ。

今は山口の嫁さんになってしまったいる野口さん。

彼女は入社当時、立てば芍薬とはいかなくとも、タンポポよりはずいぶん美しかった。

俺より一年後に入ってきた彼女に、ずいぶんときめいたこともあった。

彼女の頭の回転の速さとか、華やかな雰囲気に気圧されて、誘うこともできなかつたけど。

あれだけ仕事ができるのに、短大卒だつてだけで一般職でサポート業務しかさせない、会社のシステムつてなんだかヘンだ。

俺がそう言つたつて何にも変わらないから、誰にも言わないけどね。

いつの間にか「若手の飲み会」に誘われなくなつた俺は、先日一度だけ、山口と水元に誘われて、酒の席に顔を出した。

「長谷部さんが来るなんて、珍しい」

そう言つて歓迎してくれた後輩たちは、時間が過ぎるにしたがつて、俺の入つていけないノリの話題に移り、お開きになる頃には、気を遣つた水元さんが隣に座つているだけだつた。

仕方ない。喋るのは苦手だし、今風の話題にもついていけないんだから、後輩たちが悪いわけじゃない。
気を遣わせたくないから、やつぱり「若手の飲み会」は、誘われてもパスしようと思うだけだ。

「長谷部さん。設備施工部、今忙しいですか」

「また小商いの工事とか言わないよね?」

萩原の俺への問い合わせに、隣の席が、即答する。

俺の所属する部署は、基本的にビル物件の空調設備の設計施工を行うので、店舗や住宅は扱わない。

「物件のエリアがダブつて、エリア外の工事店にやらせると、後でメンテ契約の時、揉める傾れが……」

その物件に関しては、開発営業部の津田から、先手回しのメールをもらっていた。

「そこを揉めないようにするのが、営業の手腕だろ」

「それが難しい工事店だから、頭下げに来たんですよ」

「山口に相談しろよ。得意だったり、煙に巻くの」

「他部署だし、現場から離れちゃってるし」

俺より何年か先に入社した生田さんは、とにかく仕事を増やしたいタイプの人だ。

工事店に仕事をまわすより、元請けが直接工事した方が利益率が高いのは知っている癖に、少し手が空いていても、利益が大きい仕事をだけをメインに、小商いをしたがらない。

「いいよ、個人商店だろ? 予算出でんのか」

気の毒な萩原を解放してやりたくて、生田さんの言葉を遮つた。

多分部内で調整しても、うまい業者が探せなくて、こっちに来たのだ。

物件は今、混んでいない。予定外の工事が一日くらい入つても、俺的にはまったく問題ないタイミングだった。

「長谷部、安請け合いすんなよ。まず申請書あげてもらわないと」

「口頭で答えてから申請書なんて、よくある流れじゃないですか。萩原、とりあえず図面送つて」

嬉しそうに自分のデスクに向かう萩原の後姿に、生田さんは舌打ちした。

「他部署にどうにかしてもらおうつたのが、気に食わねえんだよ。長谷部は甘いな」

「こっちにも利益は落ちるじゃないですか。それに萩原、最近仕事にノリはじめたとこだし」

「本人の好不調で、請けたり請けなかつたりすんのか、お前は」イヤガラセのようにマウスをポンポン叩いてみせる生田さんに、とりあえず頭を下げる。

萩原は今年に入つてから、仕事への姿勢が変わってきてるし、やついうヤツはこっちも応援したいんだけど。

「長谷部さん。萩原の無理を聞いてくれたみたいで、ありがと」

ざいました

一人前の中堅営業社員になつた津田が、パーテーションの上から顔を出した。

今でこそ萩原の指導担当だけれど、こいつもいろいろやらかしたクチだから、必ず後輩のフォローに入る。
仕事つてのは失敗してナンボだから、寒はやらかしたヤツほど成長が大きい。

「津田あ。こっちの仕事増やすように指示したのは、おまえか」

生田さんが、文句言つ気満々で噛み付く。

「大丈夫ですよ。俺が行きますから、生田さんには手間取らせません」

俺のとりなしがますます気に食わなかつたのか、生田さんは自分のデスクの前に、どん、と座る。

「長谷部みたいなお人好しに、直接話を持つてつたら、忙しくて

も請けるのわかつてんだろうが。ちゃんと後輩の指導しろよ
「いや、俺も仕事が詰まつてたら断りますつて。大丈夫だ。行つて
いいよ、津田」

手を合わせる津田に合図して、場を下がらせる。
荒れ模様の生田さんの説教を聞くのは、俺だけで充分だ。

「は・せ・べ・く・ん」

給湯室でカツブ麺に湯を入れていると、後ろから水元の声がした。

「今日も残業？頑張るねえ」

「いや、これ食つたら帰るけど。家に帰つても誰も居ないし、腹減
つたしな」

「生田さんに、また『ひちや』『ひちや』言われてたね」

「仕方ないね。考え方も違つて、俺はやっぱ甘いから

水元はくすつと笑つた。

「だからみんな、長谷部君を頼りにするんだよね。人が好いのは長
所だよ。じゃあ、お疲れ様ー」

給湯室から洗面所に向かつた水元は、化粧でも直して帰るんだろう
か。

頼りにされてると甘く見られてるのは、違つた。

本当は生田さんに言い返したいことは、山ほどあつたんだ。

「長谷部さんって、糸川さんと飲みに行つたりしてるんですか？」
経理の派遣社員の下田さんは、なんていうかイマドキひやんで、仕事よりもプライベート優先の雰囲気を漂わせてる。

小さな可愛い顔と、明るい色に染めた髪と、短いスカートだ。
大体ろくすっぽ口を利いたことのない俺に、何故こんな風に話しかけたかつて言ひと、サービス部の新人の糸川が俺に懐いてるからだと見当がつく程度。

利害関係がわかりやすくて、素直っしゃ素直なんだな。

「たまにはね。糸川も今、忙しいから」

「どんな話するんですかあ？今度、連れてつてくださいよお
他の男旦當てに気がつかなくて、気がついたら自分が除け者になつていたことは、何度もある。

座を取り持つほどの話術は心得てないから、俺以外で盛り上がりてる話を耳にしながら、ただ同じテーブルに向かつてるだけで、結構消耗する。

好意を持ちつつある女の子に、そんなことをされると、結構へこむんだな。

だけど悟りきった傍観者になるほど、俺もまだ諦めちゃいないわけだ。

三十四にもなれば、それ相応に家庭なんか持っちゃつて、子供の一人一人つてのは、俺が学生の頃抱いてたイメージなんだけど、今の自分を鑑みてみれば、それはあんまりリアルな空想じやなかつたらしい。

そりや、彼女がいた時代はあった。

一番最近だと五年くらい前に、やけに「結婚したら」って言葉の出

る女の子がいたな。

俺がそこまで盛り上がる前に、とつとと他の男を見つけて結婚しあがつたけど。

「あなたは、結論が見えてるんだか見えてないんだか、わかんない」

「もつとじっくり考えようよ」って言ったときの、返事だった。つまり、結婚が見えてれば待てるけど、これから考えるんじゃ話にならんつてこと、だつたらしい。

山口と野口さんが、一緒に会社を出て行く。

あんまり生活の見えないカッフルだけど、これから一緒にメシ作つたり、洗濯したりすんのかな。いいな。

ドラマみたいな恋愛や、分不相応なロマンスは、期待したくたつてできない。

ただ俺みたいな地味な男を、気に入ってくれる子がいれば、大切にしたいとは思う。

実際のところ、職場以外で女の子と話すことなんてないし、職場の女の子の眼中にも、入ってないけど。

つまり、お見合いシステムみたいなところに金を落とすか、このまジジイになつていくか、なのかも知れない。両方とも、嬉しいではない。

「あ、長谷部さんも、メシ行きません?」

気楽に声をかけられたので、てっきり山口と津田だけかと思つたら、
野口さんと水元が一緒だった。

同期の水元を呼び捨てなのに、年下の野口さんにだけ敬称をつける
つてのもおかしいけど、距離感が違う。

多分それが、俺の融通の利かなさの証明のよつなものなのだ。

居酒屋に腰を据え、身体なりに大食らいの津田が（こいつの奥さん
は、かなり小柄だ）せつせと料理を口に運ぶ。

山口は津田をからかって遊び、野口さんが時々それに便乗する。
水元は若干大人らしい態度で、でも場から浮き上がらずに話に加わ
つている。

俺は、浮き上がりていないか?

確かに話しやすい面子で、野口さんにもまだ緊張はしない。

「長谷部君、梅割り?」

あまり酒の飲めない水元が、世話を焼いてくれる。

ノリ良く話せないことに、卑屈になる必要はないと、わかつてはい
る。

俺はこのペースでしか他人と付き合えないし、生まれ持つての外觀
を挿げ替えることはできない。

今風じやないかも知れないけど、他人の迷惑にはならないわけだし、
社会生活にも不自由はない。

ただ時々ふつと、山口みたいに喋れればいいな、とか、萩原みたい
に女の子と気軽に口が利ければ、とか思う。

他人を羨むのに、努力とか理屈はない。

「下田さんに飲みに誘われなかつた？」

水元に話を振られ、ぼうとした頭を会話に切り替える。

「糸川と一緒にって話？」

水元は曖昧な顔をした。

「長谷部さんにふられたあつて言つてたよ」

直接声をかけたのは俺でも、田当てはどう考へたつて違うだ。

「最近サービスは最近忙しいみたいだからね」

「ああ、あの子、結婚相手探すのに派遣やつてる、みたいなことこの
があるからね」

山口が言葉を挟み、野口さんが同意する。

「仕事はちやんとしてるんなら、問題ないんじやない？」

津田がそう言つと、水元は箸でテーブルをとんとんと叩いた。

「ミスだらけなのよお」

「まだ入つてきて、一ヶ月だろ。慣れないんじやないか？」

俺が返事をすると、山口は俺の肩をぽん、と叩いた。

「長谷部さんつて、やつぱり優しいよなあ。先週、大変だったんじ
やない？」

新規の客先の資産状況を調べて、取引の前提として信用限度額を設定するのは、多分どこの会社でも経理の仕事だと思う。

まあ2桁万円ならば、資産状況の質問状に記入してもらつてお終いだし、逆に大物件を扱つているような会社は、公開している。

問題は、3桁前半の取引の見込みの場合だ。

大抵の場合は興信所に情報があるのでOKなのだが、直接の契約が子会社だつたりすると、わけのわからないうことになる。

そして今回の場合は、ちょっと小うるさい客だつた。

発行してもらつた発注書に書かれた会社名は、興信所にデータがなかつた。

そこで税理士が発行した決算報告書の一部を「ペーパーでもらつ」とになるのだが、それの連絡をしたのが、下田さんだ。

生田さんの物件だから、本来なら生田さんが客先に連絡するべきところだつたが、面倒がつて経理に丸投げしたのだ。

会社の決まりなので、御社の決算報告書をFAXしてください。

そんなものを何に使うの？

御社の資産状況によって、信用限度額を決めるんです。

契約するんだから、ちゃんと払うに決まつてるでしょう。

でも、資産を確認しないと、売れない決まりになつてるんです。

相手の財布見て、商売するの？

だつて、赤字になつてゐる会社は払えませんよね。

どうも、こんなやりとりだつたらしい。

資産状況を見せたくない会社つてのもどうかと思つけど、我儘な客は珍しくない。

これからビルを建てようつてんで、すつかり殿様気分の客だつて多

いのだ。

それ相手に「金が払える力があるかどうかの確認だ」と言ってしまったのは、あからさまにまずい。

まして「赤字になつてゐる会社は「なんて、言語道断な話だ。客先はもつ、発注を取り消すなんて騒いでるし、じつはじつちで、メインの担当の生田さんが経理に怒鳴り込むしで、大騒ぎになつた。

「慣れない女の子だから」

ちょうど萩原の現場に出ていた俺は、ことの顛末がわからなくて、無難な言葉で生田さんの怒りを鎮めようとした。

「そうだ。お前が余計な仕事を入れたから、じつちの時間がなくなつたんだ」

生田さんに「詫びて」と押し付けられた俺と、経理の課長が雁首揃えて客先に菓子折り付で失言を侘びに行き、社長宅に無料でルームエアコンを1台進呈して、やつと話が収まつたのだ。

経理の課長が会社に帰つたとき、下田さんは明るく「お疲れさま」と言つたらしく。

言葉遣いに注意してくれと諭したら、「ああいう時の対応の仕方を、教えてもらつていません」と、悪びれもしなかつたと、水元が愚痴交じりに言つていた。

「専門職の派遣だから、プロの事務屋として相手に気を配つついふのは、当然できると思つてたのよねえ」

当然のように俺に肩を揉ませながら、水元は溜息をつく。

溜息をつくのは、完全とばつちりの俺の方だとは思つんだけだ。

「ま、無事に物件契約まで済んだし、良かつたよ」

「長谷部君は、大きいわよねえ」

いや、腹が立つことは立つてゐんだけど。

いろいろ複合して腹を立てたから、どこから文句を言つていいのか、わからないだけだ。

それが先週の顛末で、その翌日、経理の課長にひびく叱られた
下田さんは、沈んだ顔で謝りに来た。

「もう済んじやつたことだから、次から気をつけてね」
そう言って、終わりにした記憶がある。

「なんかねー、大人のホールーリョクとか言つてたよー」
水元が俺の顔を見て言つ。

「誰が、誰を？」

「やーだ。下田さんが長谷部君を、よ。生田さんにござやあざやあ怒られて、派遣元にまで苦情が行つて、自分はまずこことをしたらしつつ自覚したとこで、なんか優しい事言つたんじやないの？」

「いや、特に言つてないと思うけど」

あれが優しいと思えるんなら、ひどい誤解だ。

俺は話を長引かせたくなかっただけだし、彼女自体が派遣解除になつても、実はなんとも思わないと思う。

「長谷部さんは確かに、安心感ありますよね」
ストレートな津田は、お世辞は言えないから、外からはそう見えているのかも知れない。

「ああ、そうそう。困つた時の長谷部さん頼み、とか、あるもんなあ

山口まで会わせる。

同じ会社に困つたヤツが居れば、助けてやりたいと思つのは、俺が甘いんだろうか。

「長谷部君、愛されてるねえ」

水元が笑う。

「おっさんになりかけた男に愛されても、大して嬉しくない

「あたし、不思議なのよねえ」

野口さんが唐突に俺に向かつて言つた。

「長谷部さんって、優しいし真面目だし、結婚するには良いタイプなのに、なんで独身なの？女の子の好み、つるやこの？」

顔面と頭の良い男と結婚した人に、そんなこと言われたって困る。
そつ言つてくれるなら、野口さんが俺に惚れてくれたら文句はなか
つたのに。

「派手にアピールする部分が少ないから、気付かれ難いんじゃない
?」

水元はウーロン茶なので、結構冷静だ。

俺が何故結婚しないのかの分析なんて、要らないんだつてば。
考えてみれば、山口も津田も社内恋愛で、こいつらこそ社外でいく
らでも恋愛できそうなのに、近いところで探したもんだ。
水元の離婚した相手は、確か取引先の男だった。
梅割の梅を焼酎の中で漬してみる。

明日の休みは、多分テレビ見て、終わりだ。

「生田あ。流通管理が、与信オーバーで売上計上できないって言つてるぞお」

「いや、一昨日の現金入金で、出荷できる筈だけど。入金してくれてないのかなあ」

「経理が入金処理忘れてんじゃないかあ？水元さんに聞いてみろよ。こんなやりとりの後に、名前を呼ばれるのは俺だ。

水元に内線で確認を頼んだ後、自分の仕事のためにモニタと睨めっこしていた。

しばらくしたら、パークテーションの影から、水元がひょっこり顔を出した。

「さつき連絡貰つた物件、誰の？」

生田さんの物件だと教えると、ちょっと眉間に皺を寄せてから、覚悟を決めたように中に入つて来る。

そして、入金処理ミスを報告し始めた。

「何やつてんだよ！今日の出荷があるから、現金入金で頼んだのに！経理がいい加減な仕事して、現場に皺寄せが来るんじゃ、会社はガタガタじゃねえか！」

ここぞとばかりに言い募る生田さんに、口答えせずに頭を下げる水元は、痛々しい。

大体ベテランの水元が、そんな初步的なミスをするわけがない……と、思ったのは、俺だけって訳でもない。

「まあまあ、水元さんにそんなに怒つたつて仕方ないだろ。本人が処理したわけじゃないだろし」

課長が割つて入らなければ、生田さんの文句は延々続いたろう。

「でしょ？派遣さんが処理したんじゃないの？」

「でも、私が責任者ですか。任せないで、最終チェックすれば良かったんです」

最敬礼する水元に、生田さんがまだ囁き付いた。

「処理した当人に連れて来いよ！派遣だからって無責任なことすんなって言つてやるから！」

「そこまでにしどけよ。水元さんが頭下げてる意味、なくなるだろ」

何度もペコペコ頭を下げて、水元は自分のブースに戻つていった。間接部門は地味なのに、「間違いがなくて当然」と思われやすい。実際、経理が間違いだらけじゃ、会社は立ち行かないけど。俺も現場じゃあ責任者だし（つていつても、設備施工部は平均年齢が高い）、他部署の若手を指導する立場にはいるけど、派遣社員を上手に使えるかっていうと、ちょっと自信はない。

まだぶつぶつ言いながら、流通がOKになつた生田さんは安全帯をがちやがちや言わせて出掛け行つた。

「長谷部さん。生田さん、すつごく怖かつたですね」

給湯室でマグにコーヒーを入れたとき、後ろから生田さんに話しかけられた。

「あれ、私が入金先のマスタを間違えて入力したんです。水元さんに悪いことしちゃつて」

ああやつぱり、と思ったのは、今まであんなミスはなかつたからだ。

「長谷部さんの物件なら、自分で謝りに行こうと思つたんですけど、

生田さんじや怖いんだもん」

水元なら怖いと思わないとも、言つんだろつか。

無言で給湯室を出ようとしたら、もう一度声を掛けられた。

「今週の飲み会、長谷部さんも参加するんですね？」

「わかんないなあ。多分、出ないと思つけど

「何ですかあ？忙しくても来てくださいよ。私は長谷部さんと話したい」

調子良いこと言われたって、ずいぶん懲りてるんだってば。それが自分の交友層を薄くしてるのは、わかってるけど。

金曜日の晩、帰らうとしたところで、サービス部の糸川から声をかけられた。

「長谷部さんも行くんですね？一緒に行きましょう」「飲み会？俺、参加って言ってないけど」

そこに女の子たちが通り掛った。

仕事が終わって遊びに出ようとする女の子たちは、やけに華やかだ。

「糸川君も長谷部さんも参加ですよね。先に行つてしまーす」

「俺、参加になつてる？」

驚いて聞き返すと、下田さんがにこにこしていた。

「わかんないつて言つてたから、私が保留にしきました。お仕事終わつたんなら、参加できますよね？」

わかんないつてのは、婉曲な不参加表示のつもりだったんだけど。

「ちゃんと来てくださいね。私、長谷部さんと飲んだことないんですけどから」

そう言つただけで、女の子の集団の中に戻つてしまつたのを、呆然と見送る。

参加になつちやつてるんなら、行かないのは幹事に申し訳ない。糸川が待つていてくれるので、作業着から着替えることにする。とは言つても、俺も糸川も営業みたいにスーツを着てているわけじゃなくて、オックスフォードシャツにスラックスだけど。

更衣室から出たら、今度は水元がその前を通るところだった。

「あれ？長谷部君も参加なんて、珍しいね。一緒に行くから、ちょっと待つてて」

そう言つて女子更衣室の中に消えて、すぐに出てきた。

「今日のオーバーサーティは、私だけかと思つてたら、ちよつと心

強くなつた

「え？ あとみんな二十代？」

「 そうよお。山口夫妻ははじめから不参加だし、津田君は打ち合わせ入つちやつたし、他の所帯持ちは最初から声掛けられてないしね」

三人で並んで歩いて居酒屋に向かひ。

「 良かつたわ。私だけが長老じや、ちょっと居づらこもん。一次会で引き上げるつもりだけど」

水元の言葉で、俺も二次会までは付き合わなくて良いだろ、と思つたら、少し気分が楽になつた。

「 ところで、今日の会費いくら？」

「 参加つて言つたのに知らないの？」

水元が驚いて俺の顔を見上げた。

「 それどうか、どこでやるかも知らない。俺、参加なんて言つてねーもん」

「 俺、わつわ下田さんから、長谷部さんが参加つて聞いたんですけど」

糸川がそつ言つと、水元は少し複雑な顔をした。

「 下田さんが長谷部君を、参加させたかつたつてことかしらね」

居酒屋の中は、既にざわめいていた。

糸川はあつさりと中央の席に呼ばれ、俺と水元がはじつに座りつとした時、奥から声がかかった。

「長谷部さん、じつち空いてます。たまには真ん中に来てくださいよう」

見ると一際若くて華やかな一角で、それだけで俺の居場所は皆無だ。

「いや、こじで」

そう言いながら、詰めてもらつて水元の横に腰を下ろす。

隣の席と形だけの乾杯をして、小皿と箸を回してもらつて、近くの会話を聞く。

社内の人間だけで飲んでいるのだから、話題は社内の噂話とプライベートの話半々だ。

水元はちゃんと話についてつてゐるし、時々後輩の大間違いを訂正したりしてゐる。

最近では、萩原がちょっと今まで経理に居た子とつき合つてゐるのが旬の話題で、少しきヤンダラスな扱いだけど、当の萩原が口を噤んでいるので、それに尾鱗がついてたりする。

「いいんじやない？ 最近、萩原は前よりも落ち着いてるし、他人のことを考えるようになつたよ」

「同情につけ込まれちゃつたんじやないの？」

恋愛なんて専人にしか理解できないんだから、放つておいてやればいいのに。

水元が手洗いに立つたとき、その席に下田さんがすとんと座つた。

「長谷部さん、なんでこんなにはじつに座つてゐるんですか？ 私、長谷部さんとお話をしたかったのに」

上目遣いでそんなこと言われても、何を喋つていいかわからない。
大体、なんで俺にそんなに近寄つてくる?
あんたの田当ては俺じゃないだろ?よ。

「長谷部さんって、お休みの日とか、何してるんですか?」

「寝坊して、洗濯して、テレビ見るかな。たまに、映画見に行つたりはするけどね」

「映画って、どんなの見るんですか?私、最近映画なんて見てないですー」

聞かれたことに返事をしているだけで、会話になんてなつてない。

「長谷部さんって、生田さんと一緒に部署で、大変ですよねえ」

「いや、あの人は仕事がきつちりしてるし、現場で頼りになる人だよ」

下田さんは顔を顰めた。

「長谷部さんって本当に優しいんですね。私、あんな風に文句ばっかり言う人、きらい」

優しいんじやなくて、本当に生田さんは知識が豊富で、仕事は几帳面なんだって。

「長谷部さんの彼女って、幸せでしょ?ねえ」

「いないよ」

「えー?じゃ、私、立候補していい?」

「はい?何に立候補だつて?ずいぶん調子良いこと言つもんだ。

水元が戻つても、下田さんは移動せずに俺の横に居続けた。喋るテンポが俺の一倍早いんぢやないかと思うんだけど、一生懸命にこつちに話題を振つてくるから、応えないわけにも行かない。一言一言答えると、話題がまわりに移つていき、俺についていけないハイテンションで話が展開する。

そして勝手に盛り上がりで行き、最後に戻つてきたときには、まったく別の話になつてゐるのだ。

酒の席なんだから話題がよれるのは当然だけど、それに相槌を強制されるのは、ついていけない人間には結構苦痛だ。どうにかこうにか笑つた表情だけ作つてゐるけど、時々「どう思いますう？」なんて、隣の席から顔を窺われる所以、全然気が抜けない。

下田さんは確かに可愛いし、下世話な話、持ち帰るかと聞かれたら、身体だけなら持ち帰りたいかも……なんてことを考えてると、余計に話題に乗り遅れ、そこを笑われたりする。

「長谷部さんつて天然ボケ。おもしろーい」

何かを誤解している下田さんが隣で身体を捩ると、ミニのスカートの裾が乱れて、思わず目を逸らした。

「二次会は、カラオケでデュエットしましちよ」

「いや、俺は二次会はバス……」

「行きましょうよ。連行！」

ぐいっと引かれた腕の中ほどに、柔らかいかたまりがむにゅっと押し付けられた。

それね、オジサンには刺激強いです。

居酒屋から出て、二次会に不参加の面子と一緒に駅にとつとと向かう。

「長谷部さん、今日はすいぶん楽しめつでしたねえ」
いや別に、いつも通りだつたけど。

ただ、話にはすいぶん参加していた氣はある。
ちんぶんかんぶんではあつたけどね。

そういう意味では、下田さんに少し感謝しなくてはならないかも知
れない。

腕に当たつた胸のふくよかさとは、また別問題としてね。

いつの間にか隣を歩いていた水元が、ちらりと俺の顔を見上げる。

「下田さん、すいぶん懐いてたねえ」

「ん？すいぶん酔つ払つてたみたいだつたね。なんかテンション高
い子だよなあ」

「惚れられちゃつたんじやないの？」

「俺に？まさか。ひとまわり上だぞ」

地味なパンツ姿の水元は、不思議な顔で笑つていた。

「なんで二次会に参加しなかったんですか？カラオケ、大盛り上がりだったのに」

月曜日の通路で、また下田さんに声をかけられた。

「最近の歌、わかんないから。若い子ばかりで行つたんでしょう？」「そんなに新しい歌ばっかりじゃありませんよう。今度、一緒に行きません？」

二十代前半の「古」歌は、三十代半ばには「最近の歌」だつたりするんだ。

「あんまり得意じゃないからね。楽しくて、良かつたね」

下田さんのヒラヒラしたスカートは、膝頭の覗く長さだ。

「あれ？今日は内勤ですか？」

萩原に声をかけられて、やつと下田さんが横を離れる。

女の子大好きでマメな萩原は、どうも下田さんが気に入らないらしい。

下田さんもそれを理解してて、開発営業部にはあまり近づかない。尤も、開発営業部で独身なのは、萩原の他には、奥方を早くに亡くした五十過ぎの次長だけだけど。

「午前中ちょっと設計して、午後から現場。萩原は？」

「俺はこれから、フォレストハウスです。担当の人が几帳面だから、早めに行かなくちゃ」

席に戻つてPCを開けたら、営業推進室からメールが届いていた。翌日に設計事務所と施主を交えて打ち合わせ会をするので、出席しろといつ。

課長に報告して、現場との兼ね合いの指示を仰ぎ、午前中はバタバタと過ぎていく。

早めに昼飯にして出掛けようと、作業着に着替えてロッカールームを出たら、水元にぶつかりそうになつた。

「おや、現場？ 行つてらっしゃい」

設備施工部の派遣さんは、「派遣先の会社では人間関係をつくりませーん」とて感じの人だから、女の声で「行つてらっしゃい」なんていふのは、滅多に聞かない。

「今日は外が暑いから、脱水しないように気をつけてね」

「はいはい、ということを聞いて、外出する。

水元とは入社研修から一緒に、特に何かのかかわりがあるわけじゃないけど、なんとなく「同志」な気分だ。

結婚式のウエディングドレスは綺麗だったけど、その一年後に疲れた顔で出社していた時も、俺は何もしていない。

仕事に支障をきたすこともなく姓が以前に戻つた時も、特に原因を聞いたわけでもない。

あくまでも同期の括りの中の仲の良さで、男と喋ると変わらない。ただ、他の女の子と「気安く口が利けないだけなのだ。

だから現場から会社に戻つた時、下田さんから言われた言葉に驚いた。

「水元さんと話してる時つて、楽しそうですね」

……楽しそう？普通だぞ。

「そんなことはないと思つんだけど」

「つうん、楽しそう。私も長谷部さんと楽しくお喋りしたい
ひとつくらこ喋る相手が少なくたつて、下田さんは不自由しないだ
ろうに。」

「長谷部さんつて飲み会にもあんまり来ないし、仲のいい糸川さん
となら、一緒に来てくれるかなあと思ったのに」

糸川とは別に特別仲がいいわけじゃなくて、仕事絡みで教えること
が重なつてただけだ。

会社の通路で立ち話つてのも、なんかちょっとヘンな感じ。
しかも、特別な話題はないのだ。

下田さんは帰るといひらしく、化粧を綺麗にしてバッグを抱えてる。
俺じや絶対歩けそつもない、華奢な踵の靴を履いて、これじや電車
は大変だらうなと、妙なといひに感心した。

「ま、お疲れ様。また明日」

とつあえず場を離れようと、帰りの挨拶をする。

「お先に失礼しまーす。残業、頑張つてくださいーー」
うーむ。残業、別に頑張りたくはありません。

席に戻つたら、また生田さんが怒つていた。

「IJの見積、継ぎ手が断熱の価格じやねえ！誰だ、これ入力したの
！」

女の子に頼んだだけで、まだチェックもしてない。

「おまえの物件だろ？まだ提出してねえよな？俺が気がつかなきや、
そのまま提出してたる」

そんな間抜けじやないつもりだけど、抜けがないとも言い切れない

ので、素直に受け取つておく。

生田さんから見れば、設備施工部で唯一年下の俺は、多分いまだに指導対象なのだ。

見積書を見直して、設計をもつて一度チェックし終えると、八時になつていた。

「お疲れ様ー」

パーテーションから水元が顔を出し、残つてゐる面子にクッキーだかなんだかの缶を差し出した。

「昼間の戴き物。女の子だけまわしたんだけど、ちょっと残つてゐから、残業チームで食べませんか?」

「お、水元さん、頑張るねえ。経理も忙しいの?」

課長の声掛けに、水元が答える。

「派遣さんばっかりだと、チェック業務に結構追われるんですよ。

一般職でいいから、正社員入れてくれないかなあ」

派遣社員には決裁権が与えられないでの、判断は全部正社員の仕事になる。

現在の経理部は、管理職の他に、水元の下に一般職の女の子がひとりと、派遣社員ふたり。

「前年度は、見るだけで済んでたんですけどー」

つまり、訂正があるつてことだな。

そして、前年度から変化したことといえば、派遣社員が萩原の彼女から、下田さんになつたつてこと。

俺に内勤の仕事はわかんないけど、間接部門なりのドタバタはあるんだろうな。

「毎日綺麗な格好して座つて、給湯室でさぼつてばっかり」

少なくとも、そう揶揄されるようなバカのことは、そつそつ見当たらぬ。

「さて、もうひとつふんばり」

そう言いながらパーテーションから出て行く水元は、左手で自分の右肩を揉み解していた

営業推進室の山口と一緒に、客先に打ち合わせに出向く。

打ち合わせって言つても、折衝するのは山口のみで、技術的な質問や建築や設備の設計と空調の設計のすり合わせのために同行しているわけだ。

それにしても、と、山口の顔を見る。

俺より下のクセに、室長代理で話を進めるだけあるな、こいつ。相手の言い分を飲んでるよう見えて、実はこっちの都合最優先で話を進めてる。

さわやかに、口押して相手に納得させる手腕を、授けて欲しいものだ。

客先から帰社すると、ちょうど昼休みに入るところだった。

「わあっ！長谷部さんのスーツ姿、初めて見ました。似合つー」財布を持った女の子集団から、下田さんが抜け出してくる。

……なんだろう、この子。

山口や津田なら確かにスーツは似合つんだが、基本的に作業着の俺は、革靴自体が得意じゃない。

苦笑いした山口が隣をふつと外れて行き、俺一人が下田さんと向き合つてしまつた。

「お昼休みですよね。一緒に行きません？」

思わず後退つて、首を横に振る。

女の子の集団となんて、どっち向いてメシ食つていいのか、わからんないし。

「やだあ、残念。じゃ、次の機会にまた誘いまーす

何が「やだあ」なんだか、あのイキオイだと、次にまた声を掛けてきそうだ。

俺に近寄つたつて、メリットはないだろつ！」

大体、彼女は大きく俺を誤解していそうだ。

はあつと息を吐いて自分のブースに戻り、上着を脱いで財布を持った。

同じことをして通路を歩いてきた山口と、一緒に階段に向かう。

「長谷部さん、狙われますねえ」

「そんなわけ、ないだろ。やけに懷いてるけど」

本当は、ちょっとそんな気がしてるんだ。

ただ、自惚れた後に当て馬だつたつてことも、過去に経験がある。

可愛い顔の下田さんは、俺に目をつける必要なんてない。

たとえ仕事ができなくつたつて、一度お願ひしたいつて男が山ほどいる筈だ。

だから、本当に「気がする」だけね。

「うわ、なんだこの肩、ひつでえなあ。鉄板仕込んでるみてえ」「デスクの上で丸まりつぱなしだもん。首の後ろも押してえ」掌で額を押さえ、首の後ろを掴んでやると、悲鳴が上がった。

「痛い痛い痛いつ！ やつぱりもつ、いいつ！」

給湯室の狭い空間で、水元は腕をバタバタさせる。

「週末に鍼に行くから、それまで我慢するよう」

「鍼？ ますますババアか」

「お邪魔しまーすっ」

津田が元気良く入ってきて、自分用のマグにコーヒーを入れている。「水元さん、また長谷部さんに肩揉ませてるんですか？ 長谷部さん、力強いんじやない？」

「いいのっ！ 長谷部君の指が太くていいのっ！」

「なんか卑猥つすね、そのセリフ」

げらげら笑いあつてると、下田さんが水元を、電話だと呼びに来た。そして俺に、不満そうな視線を投げて出て行つた。

「メシ行きません？」

糸川に誘われたのは、その日だった。

「ちょっとまだ、かかりそくなんだよなあ。悪いけど」

そう断ると、糸川は困つた顔になつた。

まだ大学出たてで子供っぽい顔の糸川は、そんな顔をすると、やけに頼りなく見える。

「何？ 困りごとなら聞くぞ？」

そつ言うと、他の人に聞こえないように顔を寄せてきた。

「長谷部さんを連れて来てつて言われてるんですよ」

「なんだあ？ 喧嘩でも売られんのか？ 買わねーぞ」

「いや、下田さんなんですか？」
また下田さんか。

俺のどこが気になるんだか知らないけど、オジサンに興味ありそ
な顔をするのは、止して欲しい。
免疫ないんだからね、ひつちば。

「後からでも、構わないです。『桂林』に届ますから、終わったら
来てくださいね」
出て行つた糸川を頭から抜き、しばらく田の前の設計に没頭してい
た。

腹が減つたと思ったら、八時をまわつていて、キリをつけ帰るこ
とにする。

糸川の言葉は頭の隅を掠めたんだけれど、出て行つてから一時間以
上経過しているし、義理を立てる必要はない。
PCの電源を落として、会社を出た。

「あーっ！長谷部さん、仕事終わつたんですか？」

「ローバーを出ですぐ、俺に声をかけてきたのは、下田さんだった。
「忘れもの？」

「違います。長谷部さんが来てくれないから、迎えに来たのー」
彼女は酔つていて、俺の腕にぎゅっと腕を絡め、胸を押し付ける。
見た目よりボリュームのある感触に、思わずたじろいだ。

「お仕事中なら、横で待つて連れて行こうと思つてー」

「……女の子を横に座らせて、仕事？冗談じゃない。」

酔つてゐにしる、それはあまりにも非常識な申し出だ。

黙つていたら、腕を引っ張つて「桂林」とは別の方向へ、引きずり
れていた。

「方向、違わない？」

「バッグ持つてきたもん。長谷部さんが終わるまで、待ってるつもりだつたから」

まだ途中なら、合流した方がマシって流れになつてるけど。
「どうせ帰つちゃつつもりだつたんでしよう。私と飲むの、イヤですか？」

腕には胸が押し付けられたままで、なんだか犯罪チックな気分だ。
「イヤつてわけじゃないんだけどね。苦手なんだ、人間が大勢で騒いでるの」

「じゃあ大勢じやなくて、私だけなら？」

腕にしがみついたままで、下田さんは言った。
だから、胸が当たるんだつてば……つて、ええつ？

「酔つてるんでしょ？ オジサンをからかうのは止めて、みんなのところに戻ろうよ」

言葉だけだと冷静だけど、実はかなりテンパつてる状態だ。
こんなにストレートに「氣がある」と態度に出されたことはなくて、
しかも、よくわかんない子から。

「やです。言つてることの意味がわからないほど、酔つてません」
だから、胸がね、せつきからずつと腕の中ほどにあるわけです、はい。

これを言つても良いものか。

「長谷部さんと、もつと仲良くなつたいんです」

「仲は、悪くはない、と、思つんだけど、
ひとまわり下に、しじるもどろだ。」

「水元さんより、仲良くなりたいんです」

「あれとは同期だし、別に特別何があるわけじゃないし、何イイワケ口調になつてんだ、別に疚しいことなんて何もないぞ。」
「彼女いなつて言いましたよね。私、立候補します」

スケベ心が湧いたのは、否定できない。
この会話は腕に胸を押し付けられた状態で交わされたものだし、ひとりで居るのもいい加減飽きた。
俺を誤解してなんでも、俺に向かつて好意があると呟つていいのだ。

ちょっと良じ氣分になつちやつても、無理ないだろ？
すぐに色よい返事ができるわけじゃないけど、下田さんは顔にも身体にも不足はない。

「前向きに、検討しましょ？」

「絶対ですよ！」

ぴょんぴょんと小躍りする下田さんの胸が、腕をこする。
うん、ルックスは悪くないよな。

前向きに検討しましょうつたって、何があるわけじゃない。

俺は下田さんと一緒に飲み食いしたり、映画を観に行つたりしたいわけじゃない。

確かに可愛いけど、それ以外にアピールしてくるものが見当たらぬいのだ。

あの後下田さんは、ずいぶんあからさまな攻撃を臉らつよつとなつた。

それはみんな気がついていて、俺がもてないのも、今彼女が居ないのも知つていてるから、当然俺が応じるものだと思つてる。正直、居づらい。

朝の給湯室で、下田さんと田が会つ。

「コーヒーですか？お茶？」

自分で淹れるから、大丈夫だつてば。

「長谷部さんはお砂糖なし、ミルクだけでしたね」

他の人間が居てもお構いナシの彼女の態度に、ちよつと閉口する。なんで俺で、どこが気に入つた。

本当はそう問い合わせたい。

だけど、一生懸命アプローチされるつてのが、そもそも今迄にないことで、それを切り出す隙がない。

そういうしてゐるつて、なんとなく「出来上がる間際のカツプル」扱いをればじめ、下田さんは下田さんで、金曜日の夕方に設備施工部に無意味に顔を出す。

これで白ばつくれることのできる男がいたら、それは女に慣れているヤツに違ひない。

少なくとも、現状を動かさないことにこだわつちもさつちも行かなく

なつた気分だ。

「長谷部、お待ちかねだぞ」

生田さんにまで声を掛けられ、帰り支度を始めると、ロッカールームの前に下田さんが待っていた。

「一緒に帰りましょう?」

俺、下田さんがどこに住んでるのが、知らないんだけじ。

「長谷部さんつて江古田ですよね?私は千代田線だから、この近所で食事が都合いいですよね」

「俺、住んでるところなんて、教えたつけ?」

「総務の人が、言つてました」

おい、総務!個人情報漏れてるぞ!

俺の頭の中に構わず、下田さんは話を進めていく。

「どこか、オススメのお店、ありますか?」

柔らかそうな髪が、ふわっと揺れる。

小さい顔と女の子らしい仕草は、ちょっと庇護感情をそそる。可愛いし、勘違いでもなんでも、俺に好意を抱いてくれてる。こんな子を見逃したら、当分彼女なんてできないかも知れない。流されるがままでも、別に構わない……か。

会社から少し離れた多国籍料理の店で、ただ夕食をとつただけだ。喋ったのは八割下田さんで、相槌を打つた六割は、内容が理解できなかつた。

「長谷部さんつて落ち着いてて、安心なんです

落ち着いてるわけじゃない、反応が遅いんだ。

何故反応が遅いのかというと、興味の範囲が遡にすぎて、ついていけない話を頭の中で噛み砕いてしてるから。

何度も聞き返して、気分良く喋っているのを遮りたくなくて、曖昧に頷いているうちに、話が変わっていく。

下田さんは終始にこにこしていて、それは可愛らしいんだけど。結局、何のことはない普段の続きで、やけに疲れが残つただけだった。

社内で「別に好きじゃないけど、一回お願ひします」なんて態度をとれるわけじゃないし、俺に対する下田さんの誤解が深まつただけ。

「また、お喋りしてくださいね」

そう言って地下鉄の通路に消えた下田さんの笑顔を思い出し、溜息をついた。

嬉しくないわけじゃないんだ。

こっちからも好意を抱いているのなら、願つたり叶つたりなんだけど、どうもピンと来ない相手なんだよなあ。

俺だって男だから、可愛い女の子は好きだ。

そっちの件に関してだけなら（そつちつてあつちだ）、迷わずにおりつきあいしたい。

でも、そういうわけに行かないだろ？

翌日は土曜日は思いっきり寝坊して、洗濯だけで終わつた。

その翌日も、テレビ見てネットサーフィンしてたら、終わつてしまつた。

こんな生活が続くんなら、好意を持つてくれる女の子と、とつととどうにかなつてしまえ、と自分の声が聞こえる。

もう十年若ければ、迷わずにつしていただろう。

今の俺には、この先が透けて見えてしまう。

俺に失望して去られるか、食い違いで破綻を来たすか。

結局、可愛い女の子に好意を示されて、喜んでいるだけなのだ。

俺は下田さんの中身に興味を抱いたことはないし、俺自身を見ても
らいたいと思ったこともない。

だから、これからしなくちゃならなことは、下田さんは上手く
いかないと思うと、きつぱり伝えること。

そのタイミングを計るのは、俺自身なんだけど。

……苦手だ、それ。

彼女が目を覚ましてくれるの、待っていたんだけどなあ。
その間にあわよくばつてのは、スケベ心でしかない。

そうなつてしまつても彼女自信に興味を抱けなかつたら、傷つくな
は俺の方じやない。

「長谷部さん、今週の土曜日はお時間ありますか？」

下田さんに声を掛けられたのは、水曜日の朝だった。

「いや、特にないけど」「どこ」

給湯室でしたい会話じゃないな。

彼女は派遣社員だから、任期が終わればいなくなるけど、俺はずっとここにいるのだ。

「じゃ、どこかに行きません？」

「いいで黙つてしまつのが、俺の悪いこと」

「長谷部君、おはよー」

水元が入ってきて、下田さんは話を打ち切った。

「じゃ、長谷部さん、また後で」

俺もコーヒーを貰つて出でようとすると、水元が話しがけてきた。

「下田さんとつきあつのへ~」

そり、なつちやつのかなあ。なんだかずるあると、引き摺られて行くよつな気がする。

「長谷部君が、振り回されるだけ振り回されやつだね

今、まさにその直覺はある。

「水元は、もう結婚しないの？」

バツイチなんて珍しい話じゃないし、水元はいいヤツだ。

「うーん。そう決めてるわけじゃないんだけどね。ま、めぐら合わせだから」

ちょっと肩を竦めた水元は、自分のカップにコーヒーを注ぐ。

冷え性の肩凝り、内勤の総合職は少ないから、現場に出ている俺より、責任は重い筈だ。

「いい男、いるといいな

心の底からそう思つ。

離婚の原因は知らないけど、やつれた顔をして仕事していた水元は、知つてゐる。

「長谷部君に心配される筋合ひはないの。自分がガンバレ」
オトコマエな仕草で拳を突き出した水元と、拳をぶつける。

若くはないけど、そんなに年を喰つてゐるわけでもない。

下田さんと一緒に出掛けるくらい、いいか。

俺も彼女を知らないんだから、知つてみる努力くらいしてもいいかも。

「いいよ。じゃ、美術館にでも行ってみる?」

下田さんこそう言つたのは金曜日の朝だ。

「美術館? やつぱりオトナな趣味ですね。いろいろ教えてくださいね」

好きなだけで、別に詳しくはない。

「下田さんは普段、どんなところに出掛けてるの?」

「カラオケとか、ショッピングとか」

うーん。それは俺の行動パターンの中には、ない。

下田さんと行つた美術館はとても混雑していて、人酔いしそうだった。

ひとりで出る時は混雑する午後を避けて昼前に動くので、それだけで結構疲れる。

「美術館なんて、小学校の社会科見学以来。絵だけじゃないんですね」

下田さんの感想は、絵やオブジェについてではなくて、「美術館」についてだった。

つまり、併設のカフロー や ミュージアムショップの併まいについて、だ。

「おうちのダイニングがこんなにシックなら、ステキですね」「ショッピングなんてあるんですね。雑貨屋よりセンスのいいディスプレイ」

うん、美術館や博物館に興味のなかつた女の子なら、当然の反応なのかも知れない。

可愛い女の子が隣を歩いてくるのに、一向に上がらないテンション。

仕事の義務で接待してるみたいな気になるのは、職場以外の顔が見えないからだと思うんだけど、オンもオフもこの子なんだな。よく言えば裏表なく、悪く言えば深みがない。

素直なんだけど、自分の中に溜め部分は少ない。

若いから、なんて言葉は爺むさいけど、実際にそのギャップは大きい。

「長谷部さん、聞いてます？」

「「めん、ぼうつとしてた」

だって、下田さんのカラオケの点数が何点だって、聞いたつて仕方

ないだろ。

「これからどうします?」

軽い夕食を済ませた後、下田さんが言った。

「どうもいつも、俺は帰るつもりだった。

「軽くお酒? それとも、カラオケでも?」

「いや、そろそろ帰る? 駅まで送つてくれから

「また誘つてくれるんなら、帰りますけど?」

面白くなさそうな下田さんを地下鉄の入口まで送つて、ふりふり溜

息をついた。

下田さんは、あれで楽しかったのか?

話が弾んだわけじゃないぞ? ってか、相変わらず意味がわからなかつたぞ。

チエックの半袖シャツから出た自分の腕を、無意味にさわってみた。贅沢を言える立場でも、イキオイで恋愛できる年齢でもないんだ。だからって、手近に懐いてきた女の子とどうとかなるうんて、相手に対しても失礼じゃないか。

二度目はないことにしよう。

下田さんがどう考えていても。

「土曜日は、ありがとうございました」
月曜日の朝、にこにこしながら下田さんが言つ。

「あ、いや、どうも」

こんなタイミングで、「次はありません」とは、とてもじゃないが
言えない。

いつもひじりさんどん、タイミングを逃していくんだ。

営業開発室の山口が、珍しく作業ジャンパーを着て、一緒に現場に
来るといつ。

「山口、作業着似合わねえなあ」

「長谷部さんが似合ひすぎるんですよ。ザ・現場の人」
作業着がやけにハマつていいのは、自覚している。

我ながら、現場仕事自体が向いていると思うし、俺には事務も営業
も無理だ。

ヘルメットを抱える山口を、横田で見る。

整った顔と長い足は羨ましいが、こいつの外見で俺の中身なら、ア
ンバランスこの上なし、だ。

グズグズした性格じゃあない筈だけど、「打てば響く」とは言えな
い。

まあ、いつもした外見に、いつもした中身が入ってるだけのことだ。

遅くなつて現場から帰社すると、給湯室で水元がおかしな動き方を
していた。

「何してんの？」

「腰痛体操」

痛いときにそんなことをしても、すぐには治らないんじゃないかと

思ひ。

「田の疲れが肩に来て、肩から腰に来るの」
そして、当然のように俺に肩を向けた。

「なんだ？俺は水元の専属マッサージ師か？」
「いいじゃなーい。女の肩なんて、滅多に触れないでしょ？」
襟に手を突っ込んでるなんらともかく、服の上からじやときめかな
い。

「下田さんとデートしたんだってねえ」

世間話のように水元が言う。いや、世間話か。

「早いな、土曜日の話だぞ」

「ロッカールームで下田さんが、はしゃいでたもん。仕事もあれつ
くらいで熱心になってくれるといいんだけど。さて、さんきゅ。もう
ちょっと仕事してくれ」

水元は独身だから、遅くなつても誰も気にしない。

「水元、ひとり？」

「課長がまだ残つてる。大丈夫だよ、煮詰まつてないから」
笑つた顔は、相変わらずのオトコマエだ。

女の子に向かつて怒鳴るなんて、萩原らしくないじゃないか。
しかも相手は一般職とは言え、萩原より2年先輩（つまり、同じ年）
だ。

口を突つ込むつもりはなかつた。
泣きそうになつてゐる経理の女の子に、俺も用事があつたから、
といふことにしておく。

「ねえ、指定請求書の送付先に、ウチの打ち出しの請求書が送付さ
れてるみたいだけど」

そう割り込んだら、萩原の怒りはその部分だった。

説明しておくと、H・A・ト・ラッ・ドの打ち出しの請求書つていつのは、
基本的に打ち込んだ売上がすべてアウトプットされる。機器販売だ
けなら、別に何の問題もない。

問題があるのは「工事一式」だの「マニッシュコンのあるもの」、も
しくは客先が請求形式を指定している場合だ。

「工事一式」で請け負つてゐるのに、売り上げとしては細々と人工
代やら材料代やらと計算してるので、それを相手に見せたくない
て、営業からの申請で、別の書式に変更する。

「申請書、わざわざ手渡して念押しただろ。つるさこ会社だからつ
て」

「ごめんっ！ ちょっと会議室に入つてっ！」

割り込んできた水元に、三人とも会議室に押し込まれて、半泣きの
経理の女の子は水元の隣に座つた。

「明日、各担当者と客先に、課長からお詫びの連絡するといひだつ
たの。偏に私の指導力不足っ！ 申し訳ない！」

両手を合わせる水元の、言外の意は理解できた。

今までなかつた頻発するトラブルの原因は、アレだ。
一緒に手を合わせる女の子に、萩原も怒り続ける気は殺がれたらし
い。

「派遣、交代しないんすか?」

その代わりのように、辛辣とも言える言葉が出た。

「ここだけの話、今、派遣会社と折衝中。条件だけは、派遣会社に
依頼通りなの」

主語のない会話なのに、誰の話だか全員が理解してる。

「決定じゃないし、本人も知らないから、口外無用よ。特に長谷部

君」

いきなり名前を呼ばれて、驚く。

「ピロウトークでも、止めといてね。私も今逆上気味だから。自分の指導力に、自信なくなつたわ」

ピロウトークつてね、そんな関係じゃないんだけど。

経理部二名が会議室を出て行き、萩原は盛大に溜息をついた。

考えてみれば、こいつの彼女は前年度経理の派遣社員で、問題が多くて契約更新しなかつたのだ。

水元も、気が休まる暇がないだろう。

翌日、各部署に経理課長から詫びが入り、ぐずぐずと文句を垂つ餘業に、水元が頭を下げる回った。
落ち込んでるかなと思つた下田さんは、コトの重大さがわからないらしく、普通の顔でロッカールームに出入りしている。
派遣社員交代の話を派遣会社から聞いたらい、多分驚くんだろうな。
そんな気がする、木曜日の晩。

「長谷部さん、今帰りますか？」

ロビーで後ろから声を掛けられ、驚いて振り向くと、下田さんだつた。

「あれ？月末以外で派遣さんが残業？」

「怒られてたんです。勘違いしちゃつてて、誰もチョックしてくれないし」

「……派遣、二ヶ月目だよね。先月にやつたこと、メモにしてないの？」

「してたんですけど、マニコアルも作つてくれてないし」

マニコアルにするほど大層な業務じゃなければ、口頭の指示で済ませているんだと思う。

「……大変だったね」

本当に大変だったのは、経理部の他の面々だったと思つけど。

「だから、し�ょげてるんです。帰り際に長谷部さんに会えて良かつた」

「ついつい笑つ下田さんに違和感を感じながら、地下鉄の入口横のロービーチューンに誘導される。

「ちょっとだけ、愚痴聞いてもらいたいなー、なんて」

半泣きの経理の女の子と、鉄板を仕込んでいるような水元の肩が、

ちらりと頭の隅を掠めた。

「私、派遣先チエンジしてもらおうと思つてゐんですよ。正社員の人たちは何も教えてくれないし、同じ派遣の筈なのに、私じゃない方の人とばつかりランチとか行くし」
もうひとりの派遣さんは、今年で三年目だから、それだけ気心も知れてるんじゃないかと思つ。

「水元さんなんて、私が長谷部さんとトークしたからって、冷たいんですよ」

「俺？」

思わず、声が出た。

「水元さんって長谷部さんのこと、好きじゃないですか」

「それは、違うと思つけど。そりや同期だから、他の人より話すことは多いよ？でも」

突拍子もない妄想だ。俺と水元は、そんな間柄じゃない。
「一回結婚してるんだから、遠慮して欲しいんですけど」
なんだ、そりや？

「どう設定しようかと考えてこるついで、下田さんの愚痴は発展していく。

「いつも忙しそうだから、わかんない処理を聞くのも悪いかなーと思つて、じつだらうつて処理すると、違うつて怒られるし」

「わからない処理の質問しても、怒られないでじょう」

「だつて、先月教えたでしょ、とか言われて」

ああ、頭を抱えた水元が浮かぶ。経理の処理に曖昧が許されないのは、俺だつて知つてる。

「下田さん、専門職派遣だよね？」

「そうです。ビジネススクールで、経理の勉強しましたから」

そうか、条件は合つてゐるつて言つてたな。

派遣先が交代を希望していて、派遣社員がそうしたいと言えば、それでOKなんじゅないかと思うんだけど、契約の中には色々あるのかも知れないので、俺には何も言えない。

「派遣先変わつても、長谷部さんには会いに来ますから」

「ええつと

「今週末、どうします？」

「えええつと」

なんだか考えが纏まらないいちに、週末の約束に巻き込まれる。一度目はない、どこのの話じやない。

「下田さんぐらいの子から見て、俺つてどんな風なのかなあ」
俺からすれば当然の疑問なのに、下田さんはけらけらと笑つた。
「頼り甲斐があつて、落ち着いてて。オトナだなーつて感じ
すつげー誤解。

俺が落ち着いて見えるのは、俺の代わりに誰かが主張してくれるか

らだし、中も外も十年前と大して変わつてない。

「俺ね、昔つから年寄り臭いって言われてたんだけど

「昔からオトナっぽかつたんですか、いいなあ。私なんて落ち着きなくつてえ」

物は言いよう。

勝手に喋つて勝手に機嫌を直して、下田さんが帰つていく。悪気はないし、可愛いんだよな。

だからつい、週末の約束をしちゃつたのだ。

にもかかわらず、相変わらず下田さん本人への関心なんて、全然抱いてない。

これでも彼女は、満足なんだろうか。

「えええっー今日も帰っちゃうんですかあ？」

「毎過ぎに待ち合わせて映画を見て、更に夕食も済んだ土曜日の晩。
明日も休みなんだし、もうちょっと遊びましょうよ」

「俺の腕にぎゅうっと巻きつくな細い腕。

だからね、やうすると、胸がそのまま押し付けられるんです。

「遊ぶつて言つても、俺は夜の遊び方なんて」

「お酒飲みましょっ? ね、もうちょっとと」

止しどけよ、そつ頭の中で、自分の声がする。

こんな状態で女の子に誘われたら、のつぴきならない」とになるぞ。
その気なんて、全然ないくせに。

腕に感じる胸は、なんだかそのままベッドに直行許可みたいで、ヘタな妄想をしそうだ。

このまま酔わせてやつちやおうかな、なんて不埒なことを考える程度には。

たとえば萩原あたりなら、遠慮せずにいただいけやつんだろう。
ダメだつて。俺はそんなに器用じやない。

「下田さん」

今だ、今なら次はなうって言える。

「はいっ！」

お預けを解かれたワソコロみたいな顔で、良い子のお返事をする下田さん。

「……送つて行けないから、遅くなつたら危険でしょ？」

「誰か、俺の阿呆を怒鳴つてくれー！」

「私の家、大通り沿いですから、そんなに怖くないんですよ」

「女の子が夜中にひとりで歩かない方がいい」

うーわー！分別＆オヤジ臭い、良い人発言だ。どの口がこんなこと言つてる！

「わかりました。来週にします」

口を尖らせた下田さんが頷く。

待て待て待て！誰が来週約束した？

「月曜にはまた会えるんですもんね」

いや、普通に仕事に行くだけなんだけど。俺は、阿呆だ。

「来月、お誕生日でしょう？どこかに行きます？」

総務！総務！個人情報は！

「とりあえず、おとなしく帰ります。おやすみなさい」
地下鉄の入口に消える下田さんを、呆然と見送る。
なんだかもう、話が「つきあつてる人たち」だ。
手を出そうが出すまいが、そんなことは関係ないらしい。

週半ばに派遣会社に呼び出された下田さんから連絡が来たのは、そ
んなに早い時間じゃなかつた。

『今月で、ニア・トラッドの契約、おしまいだそうです』

『チョンジしたいって言つてたもんね』

『水元さんが、仕組んだんです。私のこと、きらいですから
待て。どこからそんな発想が出る。』

『長谷部さんが私とつきあつてるから、気に入らないんです』
待て待て。俺は下田さんのことは知らないが、水元のことはよく知
つてゐる。

『気のせいじやない？公私混同する人間じやないよ』
頭を下げて歩いていた水元は、下田さんのせいだとは言つてなかつ
た。
それに、派遣先チョンジするつて言つてたのは、下田さんじやない
か。

『水元さん、ちょっとのミスで課長に言いつけるし、いつも後ろで
監視してて』

『報告義務があるし、責任者だから全部見てないと』

『ほら、長谷部さんには良い顔しか見せてない。私にだけ冷たいん
だもん』

機嫌を取るような真似はしなくても、水元なりに気を遣つていた筈
だ。

『私には何も言わないで、派遣会社に直接交代の申し出するなんて
契約の関係があるから、直接は言えないんじやない？』

『だつて、それとなく言つてくれたつて！』

仕事ができないから来ないでください、なんて、本人に向かつて言
えないだろう。

『私だって一生懸命仕事して……』

泣くのか、おい。何か醉つてないか。

「あのさ、なんで契約切られるのか、じっくり考えた?」

『水元さんのイヤガラセに、決まつてるじゃないですか』
決まつてるのか?つてか、自分自身の反省は、ないのか?

なんだかもう、可愛いとか胸がとか、そういう問題じゃない。
なんていうのが、この子、気持ち悪い。

全部自分のせいじゃなくて、一生懸命って言葉の使い方が間違つて
る。

自分は辞めたいって言つたのに、他人からのそういうつて言われて、
自分の非を全力で否定してゐる。

「水元はね、自分の指導力不足つて、他の部署に頭下げてたよ」
下田さんが返事をする前に、続ける。

「今まで、どんな派遣社員が来てもなかつたトラブルが頻発してゐ
んだ。意味、わかる?」

『だつて、教えてもらつてなくつて!』

「自分の首が絞まるのに、指導しないわけ、ないでしょ。ちょっと
冷静になりなよ」

我ながら、冷たい声だ。

下田さんの声を、それ以上聞くのはイヤだつた。

水元がどんなに大変な思いをしているのか想像もできないくせに、
自分に都合のいい解釈で、もつともらしく話を作つてゐる。

『長谷部さんも、私のこと責めるんですね』

『責めるわけじゃなくて、時々は反省した方が……』

『水元さんに嫌われてるのは、私のせいじゃありません』
だめだ、こりや。

どうにかこうにか電話を切つて、ついでに電源も切つた。

矯正してやるうつて気にならないのは、俺が下田さんをビリでもいいと思つてゐるつてことなんだな。

呆れただけで、本人に対する感情なんてない。

はじめからそうだつたのに引き摺られた俺が、一番情けない。

「肩、揉んでやるつか？」

半分以上灯りの消えたフロアを、水元がボールペンの尻で肩を押しながら、歩く。

俺の顔を見上げた水元は、視線を固定して、断つた。

「ありがとう。でも、要らない。彼女が不愉快でしょ？」

彼女つて、下田さんのことか？

まだつきあつてるつて関係でもないし、俺にその気はない。

「長谷部君だつて、自分の彼女が他の男の肩揉んでたら、イヤじゃない？想像してごらん、山口君の肩揉んでる下田さん」

言い返す前に、頭に思い浮かべてみる。

……野口さんから山口を奪うことは、不可能だわ。

あれ？労つてるとか仲が良いとかの連想じゃなくて、そっち？

下田さんのイメージ自体が、「他人に気遣いをすることの代償を欲しがる人」なんだな。

そうか、はじめに声をかけてきた時も、糸川曰当てだと思つたな。その時から全然乗り気じゃなかつたのに、あの顔と押し付けられた胸に浮かれてたんだ。

「俺、下田さんとつきあつてるつもりは、全然ないんだけど」

「またまたあ。毎週デートして、帰り時間の心配までしてやつて情報ダダ漏れ？つてか、自分の都合のいいようにしか解釈してない！『ごめんね。仕事、引き離しちやつて。だけど私も限界だつたの』くるりと踵を返した水元の肩を、思わず掴んだ。

「違うんだつて！」

もう、限界だ。思いの外早い限界だけど、我慢する必要はないんだ。

可愛いけど、悪気はないけど、素直だけど、好意を抱いていない俺には、美点より欠点が先に立つ。はつきりしなかった俺が悪い。

ひとまわりも下の、思い込みの激しい社会経験の少ない女の子。大人になるまで待つてやる力も、導いてやる力も、俺にはない。わかつててるのに、自分でずるずる引き延ばしてた。

「しみじみと、情けないんだけどさ」

「長谷部君が情けないのは、知ってるよ」

水元は面白そうに笑つて、話を聞く姿勢になった。

気を張らないで話せる女は、オトコマエに俺の話を引き出し、「あんたが悪い」と結論付けた。

「手、出さなくて良かつたね。一方的に被害者面されるとこだわ」本当にその通りだ。

他人に言葉にしてみせて、やつと決意が固くなる。

「今度は引っ張られなくて済みそう。感謝代わりに、何か奢る」酒が飲めない水元に、一杯奢るってわけにもいかないから、ランチくらいかな。

「なんで？彼女いなーって言つたじゃないですか。先週の土曜日も、また来週つて」

「俺は、そやは言つてない。否定しなかつたのは悪かつた、謝る」「信つじらんないつ！」

下田さんは思いつきり顔を歪めた。

「じゃあ、なんで一週もつきあつたの？長谷部さんも私のことを好きだと思ってたのに」

違和感、ありあり。下田さんが俺を好きだったことも、多分ないと思つた。

「本当にいめん。だけど下田さんは、俺と合わないと思つ。見えてるものが、違いすぎる」

「その気もないのに、私とつきあつたんですか」「いや、つきあつた気はまったくないんだけど。良かつたよ、仕事が終わつた時間に捕まえて。

これが会社の通路なら、明日は仕事に行けないんじやないかと思つ。『長谷部さんつて、はつきりしない人なんですね』

黙ついたら、下田さんが引導を渡してくれた。

これに感謝して、良いのだろうか？

残つた仕事を片付けに、会社に戻る足は重かつた。

半分くらいは、俺が悪い。

引き摺られたことを言い訳に、あわよくばつてスケベ心を満たそうとしたことは否めない。

下田さんに好意を抱けなくとも、彼女にも感情やプライドはあるのだと。

他人のせいにしたのは、俺も同じだ。

引導を渡されたのも、俺だ。

もつりょつと前に、いつから引導を渡してやつされすれば、無駄に腹を立てさせることはなかつたのに。

「長谷部さん、メシ行きません?」

残業を終えた津田が、ひょっこり顔を出す。

「今日、瑞穂と暁くん、保育園のイベントで外食なんです
デスクの上を片付けて、パソコンの電源を落とした。
家に帰つても落ち込むばかりだし、津田みたいにストレートな男
は、話すのが楽だ。

俺より10センチばかり長身の津田は、猫背気味に居酒屋のカウンタेに座つた。

微笑ましいマイホーム・パパの津田が、実は結構オトナだつていうのは、ちゃんと喋らないとわからない。

逆に、ちゃんと「コミュニケーションしてるから」と、腹を割つた話
が怖くないんだ。

そつ考えると、下田さんには本当に申し訳ないことをしたんだと思う。

だけど、これから先はもう、ないんだ。

そう思つたことで気が軽くなつたのも確かで、やけに調子良く飲んだ気がする。

「珍しいですね、長谷部さんが酔つ払つの
鈍つた耳に、津田の声が聞こえた。

翌日出社して通路で下田さんと会つと、思いつきり顔を背けられた。

「フンシ！」なんて言葉が聞こえそうだ。

ついでに、何人かが遠巻きに自分を窺つているのがわかつた。

情報、本当に早いな。

どんな風に伝わつてゐるのかは、想像に難くない。

いいよ、否定はできないからね。

もともと喋るのは得意じゃないし、アピールできるほどの何かを持つてるわけじゃない。

だけど、こんなことで注目されたくはないなあ。

現場に出でちゃえば、会社の中のことは関係ない。

別に敵を作つたわけでもないし、下田さんが派遣を終えれば、じきに忘れられてしまうようなことだ。

女の子に声を掛けられたら、もう少し慎重にしようとは思つたが、まあ、一生に一度の出来事だつたかも知れないとは思つ。

「長谷部、惜しいことしたな。あんな若い女、一度と捕まらないぞ」
生田さんまで笑いながら言つ。

どこまで広がつてゐるのか、恐ろしいものはある。

「俺の嫁さんと交換しろつて言われたら、交換してやるのによ」

「いや、若すぎて俺には合わないっていうか」

「長谷部は気迫が足んねえんだ」

気迫ねえ。それで年寄り臭いと言われるんだろうか。

女の子たちとはますます距離が離れ、事情を知らずに噂だけを知つた上司からは、早く仲人をさせると言われ、どっち向いていいやら。弁解をしたくないわけじやなくて、何を言つていいものやら、見当がつかないだけだ。

俺は確かに悪かつた。けど、そんなに非人道的なことをした覚えはない。

「若い女の子をからかって楽しんだ」わけじゃないんだ。
そんな器量はないし、ガラでもないじゃないか。

「ま、言いたいだけ言わせちゃえぱいいじゃないですか。どうせ居なくなつちゃうんだから」

山口がクールに言う。

焼き鳥を横呪えしても、サマになる男だ。

「まあね。女の子の評判、落としちゃ氣の毒だし」

くつくつと笑いながら、山口は俺の背中を叩いた。

「長谷部さん、人が好過ぎ。わかつてる人には、彼女の評判は地底

だし。野口なんて、家で大悪態」

「おまえ、自分の奥さんを、家でも旧姓で呼んでんの？」

「そんなわけ、ないじゃないですか。長谷部さんって素直で、俺、大好き」

山口に好かれても、大して嬉しくはない。

こうして、「おっさんとお兄さんの中間あたり」に囮まれる日々は戻ってきた。

女の子は可愛いし良い匂いだし、俺も一生独りで居たくはない。
だけど、俺を気に入ってくれれば……なんて考えは、捨てた方がいい
いらっしゃい。

合わない相手を大切になんて、できっこないのだ。

派遣社員の入れ替えで、経理がまたバタバタし始めた。今度こそと思うのか、水元は常に気を張っているみたいで、帰る頃にはぐつたり疲れた顔になつてゐる。

ただ、俺に肩を差し出すことがなくなつた。無意識だらうけど、首をぐるぐる回しながら給湯室で「コーヒーを淹れていたりする。

こつちから「肩を揉ませろ」なんて言つわけにもいかず、ひどいんだろうなと予測する程度だけ。

冷房に弱くて、夏になると社内で薄い上着を引っ掛けた水元の手足は、多分冷たい。

「胃が気持ち悪いから、帰る。お先に」

そう言つて水元が会社を出て行つたのは、6時過ぎだつた。俺が会社を出たのは、その30分後だ。

駅のベンチに座つた水元を見た。

目を閉じて、眉間に皺を寄せている。

「おい、どうした？ 具合悪いのか？」

そう声を掛けると、ゆっくりと目を開いた。

「なんかね、上手く立つていられないの。混んだ電車だと自信ないから、ちょっと空くの待つてゐる

「気持ち悪いのか？」

「吐きそんなんじやなくて、なんかこう、目眩みたいなの。歩いている分には、それでもないんだけど、直立してるとまわる」

顔色は悪くないけど、辛そうだ。

「水元つて家、どっちだつけ」

「氷川台。だから、赤坂見附で乗り換えるんだけど」

方面は、俺と一緒にだ。俺は途中で路線が変わるけど、ターミナル駅で空き座席は見つかるだろ？。

「とりあえず、池袋まで一緒に乗つてこい。掴まつてていいから」次に来た電車と一緒に乗り込み、地下鉄の階段を一步一歩確かめるように乗り換えた。

歩いている分にはそうでもないなんて言つたけど、結構ふらふらで、何度も歩調を緩めた。

下田さんみたいに、腕にござりつゝとしがみつくんじゃなくて、肘に手を添えている程度だからかも。

ラッシュユアワーワーじゃないけど、つり革は一杯程度の電車の中で、水元は体重を預ける場所がない。

「『めん、ちょっと寄りかかっていい？』

「疲てるんだろう。いいよ、体重かけて」腕にでも掴まるつもりなんだと思っていたから、肩に額が寄せられて、慌てた。

「ごめん。池袋まで、失礼」

そっち側の手をどうしたものかとあたふたして、結局水元の腰を支える。

電車の中の恋人たちみたいな格好だけど、そういうないと体勢が安定しない。

肩が薄いのは知つてたけど、腰も細いな。

ああそうか。オトコマエだけど、こいつも女だつたか。

気が抜けない業務が続けざまで、気を抜く暇もなかつたんだろう。

ターミナル駅で空いた座席に水元を座らせ、電車のドアの外側から手を振つた。

翌日元気に出社した水元を見て、ちょっと安心した。あんなに疲れるまで、張り詰めなくてもいいのに。でもそれが水元の水元たる部分だし、だからこそその信頼つてのも大きい。

「おはよ、長谷部君。昨日はありがとね」

「おう、よく寝たか?」

「晩御飯も食べずに寝たわ。おかげで、朝から空腹で目が覚めた」笑いながら通路を歩いていく水元を、ちょっと振り返つて見た。腰、細かつたよなあ。瘦せてるわけでもないのに。

男ばっかりと喋る職場は、色気はなくとも気楽だ。

作業着と安全靴は、しゃれつ気なんて出したくても出ないし、ヘルメットを被るわけだから、髪も短きやいい。

余所の部署の若いヤツなんかは、帰社するとせつせつと洗面所でワッカスを使つてたりするけど、俺は帰つて寝るだけなんだから、そんな必要もない。

「長谷部さん、設備施工部、忙しいですか?」

萩原が顔を見せる。

「ああ、津田から連絡來てたヤツ、今回はちょっと無理だわ。そつちが使つてる工事業者と違うところ、いくつか紹介するから、あたつてみて」

「長谷部さんが無理つて言つ時は、どうにも調整がつかない時ですもんね」

萩原にいくつかの社名と電話番号をメモして渡す。

「俺には相談しないのか、萩原?」

今日は機嫌の良い生田さんが、コーヒーを啜りながら言つ。

「生田さんなんて、大文句言つて説教した挙句に『ダメ』じゃないですか」

「説教は俺のライフ・ワークだ。つきあえ」

なんであんなにぼんぼんと、軽口に持ち込むことができるんだろつ。言葉だけ聞いてると、とんでもないやりとりでも、本人たちは気輕で楽しげだ。

別にクソ真面目なつもりはないけど、言葉尻に怯んでしまう俺に、あのテンポの会話はできない。

後ろから肩を叩かれ、振り向くと水元と新人さんが立っていた。

「今月の経費、出たよ」

財布が薄い時期に差しかかっているので、びつむびつむと受け取つてから、思い出した。

「あ、水元に昼メシ奢なんなくちゃ」

「なんで？」

あれ、なんでだっけ？ ま、いいや。

「いや、前にそんなことを言つた気がする」

「光栄だけど、お弁当持参なの。夜にしない？」

「高価いじやん」

「お酒飲まないから、そんなでもないでしょ。はい、決定」

答えそこねると、水元は新人さんを連れて去つて行つた。

水元と帰り時間が合つたのは、数日後だ。

「暑いねえ。ビール、ちょっともりおつかな」

「飲めないじゃないか」

「だから、続々は長谷部君が飲んで」

普段からよく使う居酒屋のカウンターで、水元はメニューを広げた。

「ほつと御新香、茶碗蒸し」

「メシが欲しくなる組み合わせだな」

「ひとりだと、魚つて外でしか食べないよね。ワンルームだから、

換気扇小さいし」

そう言えばそうかな。俺も自分のアパートで、魚は焼かない。

考えてみたら、水元とふたりだけつて初めてかも知れない。男同士みたいな気楽で誘つたけど、並んで座つても顔の高さが違う。

「今度の派遣さん、どんな感じ？」

「ああ、常識的には良い子だよ。ちやんとメモもとるし」

乾杯、とジョッキを合わせる。

「何に乾杯？」

「長谷部君のスキヤンダルの終焉に」

スキヤンダルだつたのか……

「やだ。がつかりした顔しないでよ、冗談なんだから」

慌ててとりなされて、却つて申し訳ない。

ここで氣の利いた言葉が返せれば良いのに。

「下田さんができるのは確かだつたけど、私も幾分、私情混じつちゃつたかな」

水元がらしくない発言をする。

「元ダンナの浮気相手が、あのタイプだつたのよね。可愛い顔して無邪気装つて、自分の感情のゴリ押し。最終的には妊娠までされたら、もう戦えないじゃない」

ビールをウーロン茶に変えた水元は、一気に吐き出した。

「相手がどんなタイプだつたか、よく知つてるな」

「私を通して知り合つたんだもん。大学の後輩よ。もう一度と〇Ｂ

会なんて、行かないけどね」

離婚の原因は相手の浮気だつたのか。

「社内の人には、こんなこと言つたことなかつたんだけどなあ。長谷部君相手だと、気が緩むな」

水元は誰とでも卒なく喋るし、仕事に緩みがないので、社内での信頼度は高い。

子供が居ないから残業も頼みやすいし、経理の上の方もそれに寄りかかつてゐる感じはある。

「ところで、生田さんのと、二人目だつて？」

話を変えるのは、それ以上話したくないってことだろ。

「そうそつ、もづきじやなかつたつけ。一番上が幼稚園に入つたばつかりなのに」

「奥さんの実家で、一世帯住宅建ててくれたつて言つてたね。私の実家も、妹が入るみたい」

家を建てるとか親の老後とか、そんな年回りなのだ。
ほんやりしてこりのうちに、本当にジジイになつていいく。

「最近、肩揉めって言わないなあ

「あれ、そうだった?」

きょとんとした顔は、本当に気がついていなかつたらしい。
「ちょっとはマシなのか?」

「んーん。鍼に行つた後は、何日かいいんだけど」
どれ、と肩に指を掛ける。

「冷え性だからじやないのか? 身体動かしたら?」

「運動神経、ぶつけきれてるもん。生姜サプリは飲んでるんだけど
な……つて、痛い……会社の冷房で足が冷えちゃつてねえ」

「本当にババア」

「同じ年じやない。これから一花も一花も咲かせようつてこいつ……
痛いって」

「水元、彼氏いるの?」

「ああ、バツイチはもてるつて話だねえ。話だけだけど。ビニで見
つけろつて言うのよ」

水元が茶碗蒸しをスプーンで掬つて口に運ぶ。

口紅がかされて、素の唇の色が見えてる。

水元つて、女だつたんだな。改めてそう思つた。
気を張らずに喋れるし、仕事も信頼できて、同じ年数だけ同じ場所
にいる同志だけど、女なんだ。

うつかり忘れてたけど、体力は俺より格段に低くて、もしかしたら
子供なんかも産むんだ。

「痛いから、もうつ!」

水元が肩を引く。無意識に水元の首を揉んでいた俺は、ぼんやりと
していた。

「長谷部君、酔った？お開きにしようか」

水元が俺の顔を覗き込む。

酔つてない、酔っちゃいないんだけどさ、なんか調子が狂う。

「ま、明日も仕事だしな」

「そうだねえ。ああ、明日でやつと金曜日かあ」

「俺は土曜出勤だぜ」

「はいはい、お疲れ様。いいじゃない、デートの予定があるわけじゃなし。しつかり稼いで」

そうだな。気詰まりなデートは、もうない。

家でテレビ眺めてるよつは、いいか。

池袋まで一緒に出て、閉まるドアに向かって手を振る。
去っていく窓越しに見た水元は、俺が思っていたよりも、頼りなさげに見えた。

離婚した後も、水元は気丈に仕事を続けていた。
姓を戻した時、理由を聞かれることが多かっただろう。
その度に、傷ついたことを思い出しだらうか。

客先との打ち合わせがあつて、スーツで出勤した日。

「おや、今日はどこ?」

「水天宮。毎メシは親子丼だ」

「並ぶの? いいな。私、行つたことない」

水元とそんな会話をしていると、津田がのんびりと顔を出す。

「ウチ、戌の日のお参りの時に行つたー。好みが分かれるよね、あれ

「津田君も行つたことあるんだ! 悔しいつ! 食べたいつ! 笑いながらそんなことを言う水元は、ちょっと可愛らしい。

社内では責任者面してるから若手社員とは距離置いてるし、経理つてのは他の部署からは頼りにされる反面、煙たくもあるのだ。

「友達とでも行けば?」

「何人か、誘つたことはある。親子丼食べに、そっちの方まで出たくないつて断られた」

まあ、確かに水天宮は戌の日のお参りつてイメージで、わざわざ出て行く気にはならない。

「大体、最近みんな子育て真つ最中で、学生時代の友達は、遊んでくれない」

それについては同感で、俺の友人たちも頻繁には集まらなくなつた。

「長谷部さんと行けば? 両方とも、条件一緒じやん」

津田がケロリと口を挟む。

こいつは裏も表も深読みもないから、発言にもまったく頓着しない。

「えーっと津田君。私の休日は暇ばかりだとでも?」

俺の休日は暇ばかりだけど、水元は何かあるんだろうか。

「あ、怒る人がいます? スミマセン!」

頭を下げる津田に、水元が膨れた顔をしてみせる。

「……悪かったよ、バツイチで。年下大歓迎だから、津田君の友達紹介して。できれば高収入で」

「そんな非人情なことはできません」

「どういう意味よ!」

休みの日に会社の人間と出歩くつて発想が、そもそもなかつた。女の子たちが、買い物に行くとか旅行に行くとか騒ぐのを、不思議に聞いていた。

山口が津田の家に遊びに行つたり、津田の奥さんが野口さんと連絡を取つていたりしても、仕事の続きを家でしているような感覚でしか、見てなかつた。

下田さんと出掛けたことすら、何か義務めいた感じがしていて、自分自身がどうしたいのか全然考えなかつた。

「旨かつたら、案内してやるよ。水元の奢りで」

他の人が普通にしていることを、してみようと思つただけだつたけど。

結果的には親子丼は、美味しいには美味しいかったんだけど、俺の好みとはちょっと違った。

だけど「どうだった?」なんて嬉しそうに言つ水元に、それを言つのも悪い気がして、「旨かったよ」とだけ言った。

「何? それだけ? つきあつてくれないわけ?」
本気で一緒にに行こうとしてたんだな、こいつ。

思わず、顔を見返す。

「お昼ご飯食べるためにだけ、ひとりで出掛けたくないんだもん。
行動範囲、狭くなる一方」
なるほど納得。俺もずいぶん狭くなつたもんな。

「あ、じゃあさ、神田にすつげー旨い天丼がある。しかも極安」
「天丼も好き! 胡麻油?」

「そうそう。神保町の駅のすぐ近く」

「じゃあ、古本屋めぐりもすぐだね」

そんな風に、あつさりと約束は出来上がつた。
気を張らずに済むのは、相手が水元だからだ。

約束したのが野口さんだつたりしてみろ、前の晩から緊張するから。

ビジネス服以外で会つたことなんて、なかつたな。

俺は普段からスーツじゃないから、違和感ないだろ? けど。

あ、結構ワクワクしてるかも。

下田さんの時は気が重かったのに。

相手のペースがわかつて、自分のペースと合わせてくれることも知つてて、すつごい気楽。

こここのところ友達とも飲んでないし、休日はゴロゴロして、たまつた洗濯すると終わっちゃうし。

たまにはいいね、いつせつて出掛けのも。

土曜日の午前の遅い時間に待ち合わせた水元は、普通にジーンズ姿だった。

予測外に女っぽかつたり肌を露出してたりしたら、相手が水元でもちょっと引けちゃうかも知れないけど、これなら全然問題ない。社内で見るときのアイロンの当たつたシャツじゃなくて、ふわふわしてるトップスが、いつもより柔らかそうに見える。

「長谷部君、意外に身体緩んでないね」

俺の腹を見下ろし、坂本が言う。

それにも気をつけなくちゃいけない年代だから、同じ年の水元にも、気になるポイントなのかな。

水元と電車に乗っても気詰まりにはならないし、天井は旨かった。昼メシだけで帰るのももつたいたいねつて、一緒に古本の街をぶらぶら歩く。

何せ影響を受けてきた文化が一緒にから、話はどこからでも繋がる。「あ、ちょっとちょっと待つて！」

一軒の古本屋を覗き込んだ水元は、何冊かの本を抱えて出でてきた。「これこれ、子供の頃、この装丁で読んだの！」

それは俺にも見覚えのある子供向けの本で、小人を見つけた少年が、大人になってから小人たちと一緒に生活する話だ。

「そんな子供向けの本、読むの？」

「児童書、好きなのよ。それに、名作に年齢は関係ないよ」

購入した袋ごとぎゅうっと抱きしめて歩く水元は、なんだか子供っぽい。

「ああ、いい日だなあ。」はんは美味しかったし、探していたものは手に入つたし

「若くて可愛い女の子じゃなくて、ごめんね？」

「いや、俺も充分楽しいから」

若くて可愛い女の子からは、ちょっと前に声をかけてもらつた。外から見ている分には楽しいけど、こんな風に充実しなかつた。水元相手じゃときめきや緊張はないけど、その分楽しい気分はダイレクトに入つてくる。

紙袋だと持ちにくいくと、水元は布のトートバッグを買って本をそつちに移した。

肩に掛けようとしているので、それを止めて俺が持つてやる。

「それ以上肩凝つたら、具合が悪くなるぞ」

「休みの日はそんなでもないもーん。今度の派遣さん、結構動くし
本つて結構重いから、肩なんかで支えると負担になる。

「ま、いつか。誰かに荷物持つてもらつなんて、久しぶり

水元は、にっこり笑う。

「買い物に行って、缶詰とかミネラルウォーターとか買うじゃない。
手が痺れまくり

結婚する前、水元は親元から会社に通っていた。

離婚した後に親元に帰らなかつたのは、親に申し訳なかつたからだ
といつ。

「幸せに暮らす筈の娘が、あんな短期間で10kgも痩せて帰つて
もねー。そうしてゐうちに、機会逃しちやつて
軽く言つけど、それについてどんなに悩んだろ？

「……大変だつたな」

「さうよう。離婚つてすぐ消耗するのよ。長谷部君もそんなこと
にならなつようになね
いや、結婚すらしてないけど。

「今日は楽しかった！ありがとうね」

乗換駅で元気に手を振る水元に、手を振り返す。

何をしたわけじゃないのに、俺も楽しかったなあ。

水元も同じように楽しんでたら、また一緒に出かけてもいいな。

楽しめることは、多い方が良いに決まってる。

休みの過ごし方が、ひとつ増えたじゃないか。

いつも通りの日曜日、洗濯と掃除をして、じゅりと横になる。

昨日の方が、疲れが取れた気がしたな。

考えたこともなかつたけど、水元も当然今日は休みで、あいつは俺みたいに「ゴロ」ゴロしてるんだろうか。

重い買い物は手が辛いとか言つてたけど、自転車はないのか？

運動神経がぶつちぎれてるつて話だから、乗れなかつたりして……まさかね。

気がつくと前日の外出を反芻していて、自分が普段どれほど退屈しているのか、自覚した。

次はどこに誘おうかと考えてしまつ程度には。

一緒に出歩く女の友達つてのを今まで持たなかつただけで、他の人は普通にやつてることなんだろう。

俺に積極的に近付いてくる女は居たことがなかつたし、俺は俺で慣れないものだから、どうしても緊張してしまつ。

水元に近付く男が多いのか少ないのかなんて、考えたこともなかつたけど、一回結婚してるんだから、確實に水元を女として見る男がいるわけだ。

そういう意味では、水元は俺にとつて貴重で稀有な存在だ。だからつてわけじゃないけど、少なくとも大事に考える対象ではある

る。

「土曜日はいつもー」

月曜の朝、かるやかに俺の目の前を通り過ぎた水元は、いつもの水元だ。

堅く考へることはないんだな。社内で知り合つても趣味で知り合つても、友達は友達だ。

そう思えば、次も気楽に声を掛けられる。

「今度は、水元のオススメの昼メシで行こう」

次に声をかけたとき、水元はかなり驚いた顔をしていた。

夏の間に水元と3度一緒に出掛け、次はぜひこへ誘おつかと考えるのが楽しくなった。

昼前に待ち合わせをして夕方に別れるパターンが出来上がり、金のかかる場所に出掛けるわけじゃないし、同期同士でお互いの懐も推察できるしで、気楽なことこの上ない。

早くこんな楽しみ方、見つけとけば良かつたな。

どこに行こうか何をしようかと考えるのは、ネットサーフィンするより刺激的だ。

水元の肩凝りは相変わらずで、残業のあと涙田で「肩が気持ち悪いよう」と、机に突っ伏してしたりする。

前みたいに、俺に肩を差し出さなくなつたけど。
肩揉んでやるくらいなんでもないんだけど、自ら肩に手を伸ばすのは、なんだかセクハラめいでいる気がしないでもない。

時々山口や津田と晩メシに行くと、ひょっこり現れたりはする。

「水元さんつて、女人なのに仕事の話がてきて、いいですよねえ」
水元の社内の立場を、津田が明確な言葉であらわした。

そうなのだ。水元の性別は、女なのだ。

「今年は泳がなかつたなあ」

4度目に待ち合わせた9月のある日、水元は大きく伸びをしながら言つた。

「泳げんの？」

「……浮くことはできる。いいのつ！海に行つたりプールに行つたりつて気分で、夏を実感するのよつ！」

ああ、季節モノのイベントにも、ここぞこのふ、とんと無沙汰してゐるな。

「子供でもいればね、子供をダシにして遊んで歩けるんだじねえ
水元は溜息を吐く。

俺の友達も、やれ祭りだプールだと黙つて出歩いていく。

「苦労さん、とか思つていたんだけど、自分の楽しみでもあるんだ
な、あれは。

「子供、欲しかつた？」

「ああ、彼女より先に妊娠してればほつて思つことはあつたわね。だ
けど、こっちに子供ができるに向ひもつてことになつたら、修羅場
だつたでしょうねえ」

けらけらと笑いながら、水元は手を振つた。

「これからでも、チャンスはあるだろ」

俺が言つた言葉は、慰めだつたのか氣休めだつたのか。

ただ口に出した途端に、水元がまた誰かと結婚する可能性について、
リアルに考えが至つた。

「お詫びに、肩でもお揉みしましょうか」

サービスの糸川が水元の肩に手を掛けたのを見たとき、あんまり良い気分ではなかつた。

「いや、結構。それより、不備をなくしてくれるとありがたいね」
そう言いながら肩を逸らす水元に、ちょっとほつとしてから、疑問に思つた。

俺が肩を揉んでやると言つても、水元は肩を逸らすだらうか?
これまで散々、当然のように肩を揉ませてきたのに。

そういうえば、水元が肩を揉めと言わなくなつたのは、いつからだろ
う?

少なくとも春にはそれが当然で、下田さんの不首尾のストレスで鉄
板みたいになつた肩に触つた記憶がある。

意外に薄い肩で、パンパンに張つていると、ツボを探すことも難し
くなる。

鍼に通つてゐつて言つたから、少しば Mash になつてるんだろうか。
なんで、こんなことが気になる?

一緒に出掛けようになつたら、水元の細かい表情が、見えるよう
になつた。

会社で責任者然としているのとは別の、案外とおつとりした素顔が
ある。

だけど俺が怯むような人間関係は、オトコマヒに笑いながら裁いて
いつてしまつ。

頭の回転が早いんだな、ケースバイケースつてやつができるんだ。
こんな風にじつくりと水元を分析したこともなくて、いろいろな顔
があるなあと思う。

男同士であるなら、仕事の延長で飲みにも行くし、日頃のバカ話で気心も通じる。

表面しか知らなかつた人間を、知つていく過程は結構楽しい。

そして、しみじみと損をしてたなあと思う。

もつと早くに、こんな風に仲良くなつておけば良かった。

水元は、どうなんだろう？

俺以外にも遊び相手が居て、それぞれとこんな風に食事したりバカ話をしたりしてるんだろうか。

その中には、水元を女と認識している男がいるのかも知れない。何かの拍子にそれが表に出て、水元自身がそう思われる事を不快に思わなければ。

……あ、やばい。

水元は、また結婚する気はあると言つていたのだ。
恋愛を拒否するつもりなんて、ないだろ？
何がやばいんだか、よくわかんないけど。

「あー、今週はちょっと予定アリ
5回目に誘った時、水元はあっさりとそう言った。

それに対してもショックだったのが、自分でも意外で、驚く。

なんとなく水元も、俺と同じように次にどこに行こうか楽しみにしてくれてる気がして、本当は自分だけが楽しんでるのかな、なんて。だとしたら、下田さんと同じじゃないか。

下田さんだつて、俺が楽しんだと想つてたかも知れないじゃないか。

なんだか俺、浮かれてたのかも知れない。

喋りやすくて、誰から見ても女で（俺は忘れてたけど）、一緒に外出しても違和感のない水元が、俺と一緒に楽しそうに見えてるから。だけど、それが水元の「ケースバイケース」ってヤツで、俺に合わせてくれてるだけだつたとしたら、俺だけが阿呆じゃないか。

それにしても、何の用事なんだろ。

見合い、とか？うわ、それも可能性はあるのか。

俺だって、実家から何回か言われたことはあるぞ。具体的な話にはならなかつたけど。

……困る、のか？水元が決まった相手と会つたり、見合いしたりする、困るのか俺は？

友達ならば、祝福してやつて然るべきじゃないのか。

最初に結婚した時、祝儀持つて結婚式に出たじゃないか。

二次会の幹事まで引き受けて、シャンパンタワー仕組んだりしてさ。あの時は別に、困らなかつたぞ。

まあ、今みたいに一緒に遊んだりはしてなかつたけど。

なんだか考えるのが面倒だ。

大体、何の予定かなんて聞いてどうする。

その時はその時、ケースバイケースだ。

女とでも友達付き合いできると学習しただけで、良しとしなくては。

これからでも、そんな相手ができるかも知れない、その練習だ。

今更それを学習しても、使えるかどうかわかんないけど。

その週の週末、溜まつた洗濯物を干しながら考えていたのは、そん

なことだった。

「妹がねー、一人目出産で、家中ばたばたなのよ。不肖の姉、助つ人ー」

その言葉にほつとしながら、なんだかなあと考える。

本当なら、自分もそんな時期だもんな。

水元は女だから、もつと強くそう思つてゐるかも知れず、そうすると俺と遊んだりするのは、生産性にもとる行為じやないか？いや、暇つぶし程度か。

「でも、今週は平氣。どこか遊びに行きたい場所があつたの？」

うつ、と詰まつた。ないんだ、そんな場所は。水元と遊びに行きたかつただけ。

詰まつた俺の顔を見ていた水元が、笑つた氣がした。

「私ね、今、bunkamuraに來てる絵が見たいんだけど」

「おお、それ。じゃ、今週行こつか」

そうして約束して、普通に仕事する。

なんだかワクワクしてしまい、自分の脳味噌に「この浮つきようはなんだ」と問い合わせたくなる。

残業帰りにまた水元が自分の肩を揉み解していたので、声をかけた。

「揉んでやるうか？」

すぐに手が左右に振られ、苦笑いが戻る。

「大丈夫大丈夫。前ほどひどくないから」

「じゃ、お先にー」

経理のブースを出たら、ひとりごとめいた咳きが聞こえた。

「どうにはへんなきがはえている」

戻つて聞き返すのもおかしな感じだし、俺に聞かせるつもりなら、

多分呼び止めただろう。

書類読み上げたのかも知れないし。

週末を潰させて申し訳ないような気分と、それを上回る高揚感。

どうも俺は、水元と一緒に週末を過ごしたいらしい。

水元も楽しんでくれると、いいなあ。

そして、もつとお互いの気心が知れれば。

……知れれば、どうなるんだ？

間抜けなことに、その時にやつと気がついたのだ。

水元とどうにかなりたいなんて思つてなかつたから、自分で気がつかなかつた。

もつと水元と深く知り合つて、できれば毎週予約で埋めてしまつた
いくらい、プライベートで会いたがつてる。

俺つて、自分への反応も、すつじく鈍い。

本気で自分を阿呆だと思ったのは、久しぶりだつた。
 女の子つてのは取つつき難い存在で、そこをどうにかこいつにかクリ
 アしなければ、近寄れないもんだと思ってた。
 だから唯一緊張しない女である水元は、恋愛対象から外れる筈だ。
 にもかかわらず、俺は水元と一緒にいるのが楽しいし、プライベー
 トでもつと親しくなりたいと思ってる。

今ですら仕事の人間関係より、ずいぶん近くなつていいのに。

bunkamuraで目的の絵を見た後、水元が言つ。

「こまま原宿まで歩いてお茶しない？好きなカフェがあるの
 カフェねえ。女の子つて店の雰囲気がどうの、カップがどうのつて
 調べるの、好きだよな。

水元の歩調に合わせて、ぶらぶらと歩く。

「俺さ、この辺の道、不案内なんだよね。どこ歩つてんのか、ぜん
 ぜんわかんねえ」

「私は学生の頃、散々ウロウロしてたから」

その後、学生の頃何をしたかという話になつて、同年代だと微妙に
 クロスしていく面白い。

「男子校から工学部だつたからな。サークルも入つてなかつたし、
 バイトは実入りの良いガテン系だつた。今考えると、しみじみと寂
 しい青春だなあ」

「長谷部君らしいー」

「それ、褒めてないから

にこにこしている水元が、方向を指差す。

「そこの通りの奥。ちょっと小道になつてるから、六場の」

向かい合わせに落ち着いて、ビールのレモンジューク割なんか飲んでる。

ちょっとだけ冷たい風が吹いていて、半分デッキに出ているような席だと、冷え性の水元は肩が冷えるんじやないかと気になった。

「席、交換しない？こっちの方が風があたらない」

照れくさうな顔をした水元と、席を交換した。

「長谷部君つて、ちゃんとそうやって気を遣える人なんだよね」確認するみたいに、俺の顔を覗き込む。その顔が、妙に可愛く見えた。

いつも通り夕方になつて、帰ろうと電車に乗る。

乗換駅で別れようとして、帰り時間が惜しくなつた。

「晩メシ、食つてかない？」

水元は不思議な顔で笑つた。

「やつと、誘つてくれた」

やつと……？えーと、それつて。

頭を一生懸命使つてゐる間に、水元が歩き出す。

「どうにはへんなきがはえている」

歌うように呟いた言葉には、聞き覚えがある。

「それ、何か意味がある言葉？」

「わかんないんなら、いい」

わかんないから、聞いたんだろ。

普通に居酒屋に入つて、ほんやりと水元の顔を見る。

今日は綿のセーターにジーンズ、カジュアルな分若々しく見えて、

やつぱり会社で会うのと違つ。

「悪いな、晩メシまでつき合わせちやつて」

「あのねえ。休みの日にまで、気が向かない相手と出掛けると愚つ

？」

水元は頬を膨らませて、子供っぽい顔をした。

「長谷部君つて、自分のこと過小評価してない？下田さんただつて、

向こうから誘われたんじょ」

だつてあれは、何かの勘違いで。

「まひ、やつやつてびっくりした顔する。甲斐のない男ね、まつた

く

ふつ、と溜息をついた水元が何を怒つてゐるのかわからない。

「黙られちゃうと、何言つていいのか悩むのよね」

そつ言つた後、水元はふつと笑う。

「ま、いいや。長谷部君が長谷部君だつて証拠みたいなもんだね」

それからはいつもの話になつて、水元は機嫌良く皿をつつく。

気が回るのもいつもと一緒に、俺のジョッキが空く前に、追加のオ

ーダーをしたりする。

楽だな、水元と一緒にいる。

水元も楽だと思つてくれてるといいな。

「水元つて、俺と一緒に出かけたりメシ食つたりして、楽しい？」

聞いてしまつたのは、肯定して欲しいからだと思つ。

俺は、すぐ楽しいんだつて言いたい。

「ばか」

戻ってきた言葉が意外で、思わず顔を見返した。

「私、一回だつて不機嫌な顔した? してないよね、楽しんでるんだから。そんなこともわかんないの?」

言葉が喧嘩腰で、うろたえる。

俺は何か、気に触ることを言つたろつか。

「なんか、怒つてる?」「おそるおそる聞いてみる。

「すかたん」

「へ?」

「あんぽんたん」

「なんで?」

「もういいつ!」「

水元はぱいつと横を向く。
素面だよな、大して飲めないんだから。

黙つてしまつた水元を、どうしていいもんだか持て余して、俺も黙つて梅割を飲んでいた。

「長谷部君つて本当に……」

水元が急に笑い出したので、機嫌が直つたのかと一息ついたら、次の言葉でふいを突かれた。

「鈍いにも程がある」

「何が?」

思わず声が大きくなる。

「とうにはへんなきがはえている」

「何だよ、それ」

「唐変木つて言つたのよ、すかたん」

唐変木つて、すかたんつて、俺?

「こここのところ、ずっと態度に出してたつもりなんだけどなあ。そんなに私の態度つて、気にならないかなあ」
水元は頬杖をついて俺を見る。

「それつて、あの

意味がやっと頭に届いた。

「ずいぶん遠慮してたんだよ、私。バツイチだし、トシモトシだし」ええっと、それってその、俺が受取りたいように受取つていい言葉なんだろうか。

「鳩が豆鉄砲食らつたみたいなつて表現、あながち間違つてないね」頬杖をついたままの水元が、表情を崩さずに続ける。

「すつごく照れくさいんだけど。何か言つてくれないかなあ」何か言えつて言われたつてね、何を言えばいいつて言つんだ。

俺は、口下手だ。ツラも女ウケしない。

だからまさか、普段の俺をそう思つてくれる人がいるなんて、想像もしていなかつたのだ。

確認の言葉が出そうなのを、慌てて飲み込む。

水元は膨れた顔でメニューを開いて、オーダーを聞きに来た店員に、俺が飲まないワインを頼んだ。

「酔つたら、長谷部君の責任で送つてつてよ」

水元のリミットは、確か中ジョッキ三分の一だった。

宣言通り酔った水元を送つて、初めての駅に降りた。家まで送つてからどうすればいいのか、なんて下世話な妄想をして、そうじやないだろうと自分にツッコミを入れる。

土曜日の十時過ぎは、住宅街を歩く人は少ない。

「酔つた勢いだから、言っちゃうよお」

妙に舌足らずで、酔つた顔は真つ赤で、会社にいるオトコマエの水元とは別人だ。

「長谷部君つて、ぜんつぜんわかつてない。私が何を迷つてたんだかも、わかんないでしょ」

「水元つて、前から……」

俺のこと好きなかつて聞くのはおかしいし、興味があつたのかつてのも、違う気がする。

「好きでもない男に、肩なんて触らせるか」

聞こえたんじやないかつてタイミングで、水元が言つ。

「下田さん、辞める時に私になんて言つたと思つ? 長谷部さんは水元さんのこと、女として見てないつて言つてます、残念でしたー、だつて」

くそお、と小ちい声で呟くのは、いささか水元らしくない。つてか、女つて怖い。思い込みだけでそんなこと言つちゃうのか。

「どうせバツイチだよ。若くもないし可愛くもないよ

いきなり俺の肩に拳が降つてきた。

「だから、黙つて好きでいる予定だつたのにー!」

続いて降つてくる拳を、思わずよけた。

「一回だけ記念にテートしちゃお、なんて思つたら、続けて誘つてくれるんだもん! 期待しちゃうじゃない、この唐変木がつー!」

おーおーおーいつーーーーで暴れるなつーつてか、なんかすゞく予測外の展開に……

もつ一度振り上げられた拳を掴む。

酔つて焦点の合わない目が、俺を懸命に見ていた。

「ばか。いいよ、慰めてくれなくて」

慰めてるんじやなくて、ええと。

「俺が言いたいこと、水元が言つちやつたんじやないか」

急展開に、頭がついていかない。

「唐変木で、悪い。俺が気がついたのは、つい何日か前だ」

「何によ！」

「水元ともつと一緒にいたってこと」

水元の目が大きく開き、拳から力が抜けた。

「……嘘」

調子がいいことを言えるほど器用じゃなことは、水元も知っているだろ？

「嘘じゃないよ」

酔っ払いの目が、みるみる潤んだ。

「だって私、バツイチだしつ！」

「知ってる」

「若くないし！可愛くないし！」

「それ、さつきも聞いたから」

「長谷部君は優しいから、イヤだと思つてもなかなか言えないと思つてつ！」

「俺もそつ思つてた。水元に迷惑じゃないかつて」

住宅街の静かな道で、水元は困った顔で俺に拳を掴まれていた。

「急にそんな風に言われたつて……」

いや、急に言われたのは俺も同じだから。
変なところで似た物同士らしいな、俺ら。

頭の回転が早くて氣の回る水元は、意外などひどいおつとつしてい
る。

「うわあん、もつたいないつ！」

水元は急にしゃがみこんだ。

「こんな大事なこと聞くのに、私、酔つてるつー。長谷部君は一度
とこんなこと言ってくれないつー！」

大学生らしき若い男が道を歩いてきて、俺たちをまじまじと見ながら通り過ぎて行った。

慌てて、水元を立ち上がらせる。

「言つづー・素面の時に言つから、立て！」

「嘘だね。長谷部君みたいなあんぽんたんは、そんなことしてくれないね」

ガキみたいになつた水元の指示通りの道順で送つた。駅から十二・三分つてとこなんだろうけど、歩くのに三十分以上かけた気がする。

「ここ、私が住んでるとこ」

小さなワンルームマンションっぽい建物を、水元は見上げた。えーっと。どうしたらいいのかな、こんな微妙な時。

「素面の時に仕切りなおすー。すかたんの長谷部君、おやすみー」今一つ呂律の怪しい水元が、オートロックを開錠してロビーに消えていった。

帰りの電車に揺られながら、何がどうなつてゐるのか整理しようと思つた。

にもかかわらず、俺の頭の中には水元の「すかたん」が繰り返しているのである。

しかも気を抜くと頬が緩むつてオマケつきだ。
なんだつてんだ、三十代も半ばになつてゐつてのこ。
しかもこの歳になれば、そんな話ははじめっから「結婚前提」なのである。

水元と結婚、ねえ。

想像もつかないな……つて、気が早い。
要するに、浮かれているのだ。

「長谷部、なんだか調子良さそうだな」

「そうつすか？」

月曜日の朝、生田さんに声をかけられて、思わず顔を撫でる。
「色艶いいぞ、女でもできたか？」

これは普段の生田さんの挨拶で、眠り足りた月曜日なんかの常套文句なのだ。

「そうだ、早いとこ仲人やらせろ」

部長が一緒に突っ込んでくる。

三十代半ばで独身つてのは他にもいるんだけど、何故か俺にはこういう話題を振りやすいらしい。

それを横目で見ながら、水元が普通の顔で通り過ぎる。
上手いもんだな、と思う。

それとも俺が、意識しすぎか。

安全靴の靴紐を締め上げていたら、山口がロッカールームに入つて

きた。

「現場ですか？」

「おう。涼しくなったから、外が気持ちいいよ」

別に話があるわけじゃなくて、山口はロッカーから黒いネクタイと喪章を出しただけだ。

「木島設計さん、葬式なんですよ。手伝い頼まれちゃって」

「あそこ、所長だけじゃなかつたか？」

「そういう、サカグチ・アー・キテクツが仕切つてます」

営業だと、そんなことも仕事のうちだ。

しみじみと俺には向いてない。

「長谷部君、肩揉んでえ」

水元のその言葉は、やけに久しぶりだ。

夕方の給湯室、定時を過ぎて派遣社員たちが華やかに帰つていく。

「前より幾分マシか？それにしてもひでえな、老眼じゃないのか」

首の付け根をつまんで、細いなと思う。

「痛いよつ……私が老眼なら、長谷部君も可能性あるじゃない」

「尤も。なんせ同い年だ。

「また長谷部さんに肩揉ませてるんですか？本当に仲良いですか？」

入ってきた萩原が、自分のカップをすすぐ。

「坂本さん、元気？」

俺の手を離させた水元が笑う。

「これから会いますよ、来ます？」

堂々と自分の女だつて主張できるのつて、いいよなあ。
なんか俺、すごく微妙なんだけど。

「今週の日曜……」

「あ、ごめん。妹の子供と動物園に行かないよ。土曜は？」

「現場だけど」

「どうも、間が悪い。

かといって、平田と一緒に会社から出て行くつてのも、どうかなつて感じだ。

俺と水元が一緒にいたところで、不思議に思う人もいないと思うけど。

相当酔つていた水元が、記憶しているかどうかわからないけど、素面の時に仕切りなおすのであれば、その場は会社から離れていたい。同じ場所から出発して、途中で待ち合わせるつてのも、殊更に秘密めかしてゐる気がして、気乗りしない。

なんだかなあと過ごした日曜日、煮えきれない気分の夕方に水元からメールがきた。

「池袋まで出て来れる？」

こつちはひとりでメシ食つて寝るだけだから、ほいほいと出て行く。なんかさ、これから待ち合わせる相手がいるつてだけで、浮かれちゃうもんだね。

良い香りの石鹼ショップで商品を物色している水元を、店の外から見ていた。

ちらつと見えた値段にびっくりして、そういうえば、前につきました女の子の化粧品の金額に驚いたことがあつたなと思う。

「やだ。来てたんなら、声をかけてくれればいいのに。振り向いた水元が、商品を手に笑つ。

「この香り、好き？」

鼻先に突きつけられたのは、強い花の香りだ。

「いや、嫌いじゃないけどさ。ちょっと強い」

「匂のまま身につけるんじゃないもの。洗い流したあとに、肌に残るのよ」

これがまた、微妙にエロチックなセリフだ。

その香りが好きかと聞いた後、肌に残ると言つ。

会計をしてもらつてゐる水元は、何事もない顔をしてゐる。

俺が深読みしてゐるのか？

「お待たせ。ごはん、何食べよつか」

隣に立つた水元は、ものつすごくナチュラルな表情だつた。

子供相手で歩き疲れたと水元が言い、すぐに座れる場所を探した。

「疲れてんなら、無理しなくても」

「やだ。忘れたフリされるから」

忘れたフリ……仕切りなおしつてヤツか？覚えてんなら、何も仕切りなおさなくても。

「今日は素面だもん。幻聴じやないつて納得できる」

「……俺、ちょっと飲みたいかも」

少なくとも、デパート内の明るいレストランで言いたくはない。

「いいよ、帰るまでで」

にへつと笑つた水元が、照れくさそうに頷く。こんなに子供っぽい顔してたかな、水元つて。俺が知つてる水元は、気が回つて頭の回転が早くて、責任感の強い女だ。

頼りになるけど可愛くないつて話は、聞いたことがある。

可愛くないなんて、とんでもない。

これは「欲目」なんだろうか？

翌日仕事だから、あんまり遅くなる気はない。九時過ぎには送つていこうと立ち上がる。

「忘れてないでしようねえ」

くそ、そつちこそ忘れる。照れくさくていけない。

大体、さつきから可愛くてしうがない。

会社でそんな風に思つたことなんて、ないんだけどな。

地下鉄で水元の住む駅まで行つて、一緒に歩き出す。道の半ばまで歩いたら、水元は立ち止まつた。

「仕切りなおし」

「うん」

先週みたいにイキオイがついてないから、言い難いつたらない。

うつ、と口籠もつたまま、言葉に詰まる。

俺の顔を見る水元の目が光つて、綺麗だ。

視線に吸い寄せられて、思わず顔を近づけた。

ふぶつと吹き出した笑いに面食らったのは、その後。

「じめつ……ごめんつ……なんか照れちゃつてつ……」

身体を折り曲げて笑い出した水元が、途切れ途切れに言つ。途端にこっちも恥ずかしくなつて、一緒に笑い出してしまつ。ムードも仕切りなおしも、ありやしない。

今までただの同僚で、今日から恋人なんて変化は、なかなか難しい。

水元のワンルームマンションの前まで送つて、結局仕切りなおしも進展もなく別れる。

それでも何か、ほつこりとしたものが胸の奥にある。

約束はしなくとも、水元との時間がこれからゆっくりと流れの予感がある。

次は、一緒に何をしようか。

次は、どんな顔を見られるんだろう。

触りたいとかキスしたいとか、そんなことよりも先に、水元ともつと近寄りたい。

お金を出せば相手してくれるおねーちゃんは居るけど、水元に望むのは、もっと別のことだ。

何年か前につきあつてた女の子は、まず結婚の話が先立つた。

俺より結婚に興味があつたんだつているのは、今になつて理解できる。

下田さんは、自分のフィルタを通してしか、俺を見てなかつた。

水元は何年も掛けて俺を知つていて、情けないとことか口下手なと

ことか全部知つていて、それでも好きだといつてくれた。

水元が辛い顔をしていた時も、仕事で走り回つていたときも、俺は何かしてやつたわけじゃないのに。

何かしてやりたい、と思つた。

俺は不器用だし、うまいことなんて言つてやれないし、連れて歩いて自慢つて彼氏にもなれない。

でも水元が本当に、このままの俺を気に入つてくれてるんだとしたら、何か返したい。

俺を気に入つてくれたつてだけで、何か大切なものを貰つた気がす

る。

だから何でもいいから水元に、それ以上のことをしてやりたい。こんなことを考える自分が、すごく青臭く思える。いいじゃないか、経験値は低いんだから。

自分の部屋に帰つて、壁のスイッチをぽつんと押す。白っぽい蛍光灯の灯りに照らされた部屋は、味気ない。

一応の掃除はしているし、ひとりの時間を過ごすために、何不自由なく揃つた部屋なんだけど、何か足りない。

夕方からの時間が充実したから、気がついたことがある。仕事以外の人間関係で、会話を楽しんでいるのなんて、本当に久しぶりなんだ。

それが水元であることが、とても嬉しい。

仕事帰りにちよつと一杯、なんて席に水元が現れたのは、ほんの偶然だった。

何人かで飲んでいる中に山口が居て、会社に残っている野口さんを呼んだだけだ。

野口さんは野口さんで、水元と夕食の相談をしていたって話。同じ会社から出て同じ場所に帰る山口と野口さんは、帰宅経路がけつこうバラバラらしい。

野口さんも水元も結構な中堅で、男の間に座つても違和感が薄いから、呼ぶのに異論のあるヤツはない。

わいわいと飲んで、営業先が煮詰まってる津田に山口がアドバイスする、いつもの風景。

一足早く帰った津田に続いて、ぞろぞろと居酒屋を出る。俺と同じ方面なのが水元だけ、これも本当に偶然だ。一緒に地下鉄の入口に入つて、並んで歩く。

「今週も後半戦だねえ」

俺を見上げた水元が、さつきよりも少しだけ親しげに言つ。その顔が、なんていうか、可愛いわけだ。

急激に自分の水元を見る目が、変化していくのを理解する。もう、こうなると意思なんて関係ない。可愛いもんは可愛い、そう思つちゃうのだ。

「やだ、なんでこつち見てるのよ」

言われて初めて、俺が水元を見続けていたことを知った。

「あまりの美しさに、見惚れた？」

「いや、そういうわけじゃなくて」

やけに慌てて否定して、水元の唇が尖るのを見た。

柔らかそうな箇……いや、それをここで連想するな。

電車のつり革を掴む手が、思いの外小さい。

今まで、ひとりで頑張ってきたんだよな。

これから俺が、少しでも支えてやれればいいけど。

「あのさ、池袋でお茶でも飲まない？」

こんな時間なんて、ファーストフード店くらいしかないけど、まだ一緒にいたい。

「遅いから、今日は止めとく」

返事にがっかりしたら、つり革から俺の腕に、水元は掴み先を代えた。

「そんな顔してくれるのは、嬉しいな」

「週末が毎週楽しみなのって、いいな

「うん」

これだけの会話で、俺と水元の立場が確定する。

乗換駅に到着するひとつ前、バッグを持つ水元の手を、上から握つた。

暖かくて照れくさくて、進展とも言えない進展だけど、俺と水元は今、同じ方向を向いている。

たまには目的地を持たずに寛ぎながら、新宿御苑に行ってみたりする。

だだつ広い芝生ばかりが記憶にあつたけど、整つた様式の庭園は、結構見ごたえがある。

「風が秋の気配だね」

水元が伸びをして、俺の顔を見ながら笑う。

十月のはじめ、そろそろ強い日差しではなくなつてゐる。

「あのさ、手、繋いでいい？」

黙つて手を繋いじゃうほど、慣れてないのが情けない。

「そういうとこ、いちいち許可を求めるな！」

返事と同時に、俺の掌の中に水元の手が飛び込んできた。

「いつちだつて、なんて返事していいのか、困るじゃない」

「唐変木のあんぽんたん、だからな」

面白そうに笑いながら、水元が手を揺らす。

中学生や高校生の頃にこんな経験はないから、神経が手に集中してしまつ。

女の子とつきた経験はないわけじゃないし、遊んでたとは言えないけど、まあ一通りのことは……

うう、今までは、はじめつから「つきあう」と決めてつきあつてたんだから、勝手が違う。

フランス式庭園の中は、秋のバラが綺麗だ。（バラとチューリップ以外、花の名前はよくわからない）

水元はいちいち花の名前を確認して歩く。

「優雅な花つて、名前も優雅で楽しいよね」

俺はバラの名前になんて興味ないけど、にこにこしてゐる水元の表情

は、見飽きない。

唇、柔らかそうだな。

そう思つたら、視線が離れなくなつた。

今度は笑うなよ、こつちはマジなんだから。

ふつと目を閉じた水元が、心持ち顎を持ち上げる。

触れたか触れないかのさすかな感触で、顔を離した。

そのまま目を開けた水元が、微笑む。

半信半疑だったはじまりが、リアルな実感として押し寄せてきた。

水元が好きで可愛くて、大事にしたいし大事にされたい。

繋ぎなおした手は、暖かい。

「帰つちやうの、もつたいないな」

夕食が済んで送つていく電車の中、水元が言つ。

それは、ええと、何か違う意味にとつていいんだろうか。

慌てる俺とはうらはらに、水元はごくごく普通。

「明日も会おうか」

あ、そういう意味ね、とちょっと安堵して、結構がっかり。

俺だって男だからさ、そういうところは期待してるし、お互い大人だから、それは当然といえば当然だろ。

ただ、間合いが計り難いんだな、つきあいが長すぎて。

住宅街の真ん中で、繋いでいた手に力を入れた。

「どうしたの？」

水元が俺を振り仰ぐ。

上手い言葉が見つかなくて、水元の顔を見下ろした。
しっかり者で、何でも自分で解決しちゃう水元に、俺は何ができる
んだろう。

「長谷部君？」

瞬間、自分でも見えない感情に促されて、逆側の手で水元の肩を抱いた。

「ちょっと、ちょっと…どうしたのっ！」

慌てた水元が逃げようとするので、つい、両手を回した。

ああ、住宅街の真ん中の体勢じゃないなと、自分の中の自分がツッコミを入れる。

でも、一言だけ言いたい。

これだけは、今言いたい。

「ありがとうな」

「へ？」

ジタバタと水元が動く。

「俺なんか気に入ってくれて、ありがと」

急に力の抜けた水元を、まだ離したくはない。
だけど場所が場所だし、ほら、また通行人。

「ばか」

ぎゅっと深く組まれる腕。

これって下田さんもよくやった行動だけど、人によつて嬉しさが違
い過ぎ。

下田さんみたいに胸の感触がリアルじゃないけど、水元のほうが百
倍嬉しい。

水元の家まで送る、その時間も名残惜しい。

あつけなく到着しちゃつたワンルームマンションの前。

「送つてくれて、ありがと。明日、気が向いたら電話して」

「水元が気が向かなかつたりして」

軽く返した言葉の返事に、ちょっと籠が外れた。

「長谷部君が電話してくれるの期待して、一日中待つてるもん」

子供じみた言葉なのに、何かのスイッチだつたらしい。

街灯とマンションの煌々とした灯りが漏れてくる場所で、水元にキ
スした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2394y/>

行灯の昼

2012年1月13日21時51分発行